
夏なき鎌倉

hiro2001

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏なき鎌倉

【Nコード】

N5727D

【作者名】

hiro2001

【あらすじ】

海辺の町に暮らす中学二年生の僕は、以前教育実習生として学校に来ていた真波と、ある秋の日に再会する。真波の心の奥底を知りたい僕は、幼馴染のナツや女友達の和泉に相談するが、彼女たちが抱える闇の深さに戸惑い、やりきれなさを募らせていく……。秋から冬へと季節が移り変わるなかで、僕ら四人の切ない想いたちが今、鎌倉の海に溶け合います。

僕がその海沿いの駅……稲村ヶ崎に着いたのは、実に一年九ヶ月ぶりだった。江ノ電の車両からホームに降り立つと、いつもと変わらない懐かしい潮の香りがした。それは、僕に住み慣れた場所の空気のような安堵感をもたらしたが、同時に重苦しいような切なさや哀しみをも抱かせた。僕が高校を卒業してすぐにこの町を出たのも、都心の大学に通う不便さからだけではなかった。むしろ生まれ育った場所に染み付いた、青カビのような過去から逃れるためだったのだ。でも結局のところ、そこから逃げることは叶わなかった。何故なら、その過去の積み重ねから僕自身が出発しているからだだった。

華奢で小ぶりな改札を抜けて狭い通りを歩き出すと、道端には数日前に降った雪の名残が留まっていた。北側に面しているためか陽は全く当たらず、真冬の海風が僕の顔を激しく刺していた。既に午前十時を過ぎてはいたが、すれ違う人は全くいなかった。そう、今日はまぎれもなく正月だった。もっとも僕は、実家の両親に会うためにここに来たのではなかった。あの時から、一年に一回必ず訪れるあの場所へ行くためだった。

小さなスーパールの角を曲がって小道に分け入ると、曲がりくねった上り坂は鬱蒼とした竹林のせいで薄暗かったが、小高い丘の上に辿り着くと視界が大きく開け、薄い雲のフィルターがかかった青白い空の下、右手には江ノ島が、やや左手には稲村ヶ崎が、そして正面には穏やかに風いだ海の白波が見渡せた。全てが新しい太陽の輝きに満たされていたが、振り返ったその場所には、あの時のままの姿が静かに眠っていた。僕はそこに花を手向けると、灰色に佇む墓石をじつと見つめた。あれから六年の歳月が流れ、僕は今二十歳になったが、あの時の出来事を片時も忘れることはなかった。僕はただの中学二年生で、人の儂さや奥深さなど何もわかっていない存在だった。もちろん、中学二年生だからこそ感じた鮮烈な想いもあった。

たが、いずれにしてもそれは失われた過去だった。永遠に戻ることはない憧憬だった。でも、それが今の僕の礎になっていることもまたまぎれもない事実だった。全ては六年前の、秋の鎌倉から始まっているのだから。

あの時の僕は、海辺の町に暮らすただの中学二年生で、学校の校門を出ると、海に向かって一直線に伸びる道を歩き出していた。十月も半ばを過ぎ、二学期の中間テストを終えたばかりの僕は、周囲に広がる秋の気配や頭上に広がる空の高さも目に入らず、ただ試験を終えた開放感に満たされていた。

「ちよつと純、私を置いていく気？」

甲高い叫び声に振り返ると、そこには怒って頬を膨らます夏沢純と、その隣ではにかんだ表情を浮かべる青山和泉が並んで立っていた。

「別に、ナツと一緒に帰る約束なんかしてないだろ？」

「何ですって？」

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

和泉の一言で僕と純はいがみ合いをやめ、いつものように三人で並んで歩き始めた。僕ら三人は同じクラスで、特に純とは家も隣同士で、小学校の頃からいつも一緒だった。二人とも純という名前だったので、お互いに呼びやすくするために、いつしか僕が彼女の名前からナツと呼ぶようになっていた。

「でもナツ、今日は部活いいの？」

「今日はテストの最終日よ。バスケの練習は明日から」

ナツはそう言うのと、通りすがりの風に乱された亜麻色の髪を両手でまとめ上げた。そこからはほのかに柑橘系の香りがした。

「さてと、テストも終わったことだし、これから三人で街にでも繰り出すか？」

「悪いな。私、これから波乗りに行きたいんだ」

和泉は短くカットされた前髪をいじりながらそう呟いた。彼女は特に部活にも入らず、暇さえあればサーフィンをして波と戯れていた。言葉遣いも男っぽく性格もさっぱりしていたので、和泉というと僕は、いつも男友達といるような不思議な気持ちになった。

「そうか。ナツは？」

「私も、今日はお兄ちゃんとお出かけるから、早く帰らないといけないの。ごめんね」

そう言いながら、ナツが本当に申し訳なさそうな眼差しでこちらを見つめてきたので、僕はその大きな黒い瞳の奥を覗き込む恥ずかしさのあまり、自分の顔が赤くなっていくのがわかった。

「じゃあここで。また明日ね」

ナツの言葉とともに二人と別れたが、僕はそのまま家には帰らずに、海岸を走る国道を渡って砂浜に下ると、岬に広がる公園に向かった。天空から太陽が優しく見つめる中、僕は公園内の石段をゆくりと上って、やがて見晴らしのいい高台に着いた。そこは小さい頃からよく来ていた場所で、穏やかな日差しに煌く海と、真正面には江ノ島がいつもの姿を見せていた。見慣れた光景ではあったが、僕はしばらくの間そこに佇み、囁くように流れる海風を感じながら、心の錘が取れた爽快感を味わっていた。

「もしかして、高村くん？」

不意に投げかけられた声に反射的に横を向くと、視界の中には見覚えのある、でも信じられない顔がそこにあり、僕らは現状を理解するためにただお互いを見つめ合うしかなかった。

「……海野先生」

「先生はやめてよ。まだ卵なんだから。でも久しぶりだね。元気だった？」

「ええ、まあ。でも、どうしてここに」

「私の家、この近くの。ここの景色昔から気に入って、考えごとをしたい時にはよく来るのよ」

海野真波はそう言うと、遠い目をしながら彼方の江ノ島を眺めた。

彼女は、少し前に教育実習生として僕の学校にいたことがあり、都心の大学に通う四年生だった。背丈は僕と同じくらい低かったが、切れ長の目と小粒の口元は性格的な大人しさと優しさを象徴し、ストリートな黒髪は背中まで長く伸びていた。

「何か、考えごとでもあったんですか？」

「ええ、まあ……。ねえ、せつかくだから、ちよつとその辺でお茶でもしない？」

真波に促されて、僕らは高台から下って公園を出ると、海岸通りを挟んで向かい側にある喫茶店に入った。ちょうど昼時と重なっていたことで込み合っではいたが、運よく窓際の席を確保することに成功した。

「高村くんは、何飲む？」

「俺はコーヒーでいいです」

真波は、タイミングよく通りかかった店員にコーヒーを二つ注文すると、やや伏し目がちにこちらを見ながら問いかけてきた。

「四ヶ月ぶりよね。ちゃんと勉強してる？」

「まあ、そこそこには」

「頼りないのね」

でも、その後には何も続かなかった。僕は、かすかに流れる居心地の悪さを打ち破ろうと必死に言葉を探したが、どういう訳かそのかけらも思い浮かばなかった。真波も同じ気持ちだったらしく、僕と目を合わせることもなく、周囲の客の様子や窓外の景色を落ち着かない様子で眺めていた。でも、やがて運ばれてきたコーヒーが、図らずもその場のぎこちなさを解消することになった。

「そう言えば高村くん、相変わらず聴いてるの？」

「えっ、何をですか？」

「ZARDよ。前に話してくれたじゃない、学校の屋上で」

「先生はどうなんですか？」

「もちろん聴いてるわよ。まあ、今がそんな気分だっていうのもあるんだけど」

「やっぱり、何かあったんですね」

僕が尋ねても、真波は何も話そうとはしなかった。ただぼんやりとした視線を宙に彷徨わせているだけだった。僕はそんな姿を眼前に置きながら、改めて彼女との出会いを思い起こし、その悩みが何なのかを懸命に理解しようとした。そして、自分の記憶の断片とZARDの音楽が重なり合う中で、真波と初めて会った長雨が降り続く六月のあの日に戻っていった。

「今日から教育実習生として、皆さんと一緒に勉強させてもらうことになりました、海野真波といます。短い間ですが、よろしくお願ひします」

濃紺のスーツをぎこちなく着込み、窓の外で降り続く雨音に掻き消されそうな、か細い声でそう挨拶した真波は、それからしばらくの間、僕のクラスの副担任と国語の授業を受け持った。もっとも、僕が彼女と実際に言葉を交わしたのは、実習期間も終わりを迎えようかという六月の終わりだった。

その日は梅雨にしては珍しく朝から晴れ間が顔を覗かせ、僕は昼休みになると、久しぶりに学校の屋上に出て音楽を聴いた。もちろん友達と遊んでもよかったのだが、僕はただ単純に一人になりたかったのだ。屋上のフェンス越しにはいつもと同じように海が見え、波の煌きにはそう遠くない夏の気配が感じられた。僕は、そんな自分中心の時の流れの中で、本当の時間がどの程度過ぎているのかがよくわからなくなっていたが、やがて右側に人の存在を感じて振り向くと、そこにはこちらをじっと覗き込む真波の姿があった。

「何か用ですか？」

「君、高村くんよね。いつも一人で音楽聴いてるの？」

『友達がいないの？』と言われていたようで少し腹が立った。実習生のくせに先生面するな、と言いたい気持ち顔を表したつもりだったが、真波にどこまで伝わっているかはわからなかった。

「何、聴いてるの？」

「……ZARDです」

「へえ、珍しいな」

「そうですか？」

「普通男の子って、もっと他の曲を聴くんじゃないかしら」

そう言われて返す言葉を失った僕は、そのまま黙ってコンクリー

トの足元を見つめた。せつかくの一人の時間を壊されたこともあったが、友達でも家族でもない相手から曲の好き嫌いを言われたくなかったからだ。

「ごめんね。別に変な意味で言ったんじゃないの。何か少し意外だったし……。私も好きだから。ほらZARDの曲って、女の気持ちを繊細に描いてるのよね。だから、共感できる部分がたくさんあるの」

「男の気持ちも繊細に描いてますよ」

「そうね。それに、爽やかなメロディーだけど、実は結構深かったりするのよね」

そう呟きながらじつと海を眺める真波に、僕は再び押し黙るしかなかった。遠くから鳥の鳴き声が聞こえたような気がしたが、すぐに昼下がりの静寂があたりを包み込んだ。

「ねえ高村くん、あなた一人っ子でしょ？」

「えっ、どうしてわかるんですか？」

「私もそうだからよ。だから、何となくね」

『何となく』と『ね』の間が妙に気になった。言いたいことがあるのなら、はっきりと言ってほしかった。昼休みは意外と短いのだ。

「どうしてそんなことを訊くんですか？」

「ただ確認したかったのよ」

でも、その時鳴ったチャイムによって二人の言葉のやり取りは唐突に終わった。僕は真波と別れて教室に戻り、五時間目の国語の授業で再び顔を合わせるようになったが、不思議とその目を見ることができなかった。自分の心の中にさざ波が立っていたが、それが決して大波にならないことはわかっていた。何故なら、僕は既に一人の女の子の姿をはっきりと捉えていたからだ。

数日後、それは真波の教育実習最終日だったのだが、授業を終えて校門を出た所で、僕は背後からの唐突な叫び声に呼び止められることになった。

「高村くん、ちょっと待って！」

「ああ、海野先生。どうかしたんですか？」

「私も今日で最後だから、せつかくだから一緒に帰ろうかなと思っ
て」

ようやくスーツ姿が様になつてきた真波はそう言った後で、小ぶ
りな口元を少しだけ緩めた。彼女のかすかな笑みとともに、風に踊
つた長い髪が僕の目を捉えて離さなかつた。

「どうしたの？」

「あ、いや別に」

「ねえ、海見に行かない？」

行きたくなくても、この道をまっすぐ行けば海岸通りに出るのだ
が、誘われて悪い気はしなかつた。大体、言われなくても僕は、毎
日のように海と話をしているのだ。

「実はね、同じ一人っ子として、高村くんに相談したいことがある
の」

真波はその言葉だけを残すと一人で足早に歩き出したので、僕は
その意味を深く考える余裕も、まして傍らに青紫色の花を咲かせる
紫陽花を愛でる間もないままに、とにかく彼女の後ろ姿を追うしか
なかつた。

そうして二人が辿り着いた海はやや波が荒く、頭上の雲行きがや
がて降るであろう雨を教えていた。僕らは海岸通りから砂浜へと下
る石段の途中に腰を下ろし、目の前で波と戯れるサーファーたちを
眺めた。

「もうすぐ海開きよね。そうすれば、本格的な夏の到来ね」

「相談って何ですか？」

僕のフライング気味な問いかけに真波の唇が僅かに動いたが、そ
こから実際に言葉が発せられたのはかなり後だった。

「人間には男と女がいて、お互いに好きになつたり愛し合つたりす
るけど、それって一体、誰が決めたのかしらね」

「……言っている意味がよくわからないんですが」

「人が人を好きになるのは当然のことだと思うけど、そこに男と女が絡んでくるとなかなか難しいわね」

真波の言葉に、僕はどう答えていいのかわからなかった。というより、何を答えていいのかわからなかった。ただ一つはつきりとしていることは、僕と彼女の間には漠然とした、でも決定的な違いがあるということだった。

「ごめんね。これじゃあ、何が何だかよくわからないわよね。ところで高村くんは、今好きな子とかいるの？」

答える義理も必要もないので黙っていたが、それがイエスだと直感したらしい真波は、さらに畳みかけるように尋ねてきた。

「同じクラスの子？」

「別に、先生には関係ないでしょ」

「まあね。でもいいなあ」

「何がですか？」

「若いつてことがよ。私にもそんな時代があつたな」

軽く息を吐くように呟いて立ち上がり、石段を下って砂浜を歩き出す真波を見ながら、僕は彼女の言いたかったことを自分なりに理解しようとしたが、どれだけ考えても答えは見つからなかった。その理由が自分の幼さにあることは十分にわかつていたが、一方でそれを認めたくない自分もいた。そう、僕は当たり前のように中途半端で、切ないほどにまだ中学二年生だったのだ。

「高村くん、どうしたの？」

頭の奥から響いてくる声で我に返った僕の目の前には、十月の真波がこちらを怪訝そうな目つきで眺めていた。あまりにまつすくな視線に、僕は飲む気のないコーヒーに口をつけてごまかした。

「いや、ちよっと」

「高村くん、なかなか鋭いわね……。実はね、私付き合っている人がいるんだけど、どうもこううまくいかないの。歯車が噛み合わないっていうか、呼吸が合わないっていうか。付き合い始めて日が浅いせいもあるんだろうけど、何かこうしっくりいかないの」

「先生は、その人のことが好きなんですか？」

「いい人よ。優しいし男らしいし、私のことを好きだって言うてくれてるし」

「それじゃあ、答えになってないですよ」

表現があまりに抽象的で、真波の持つ悩みの核心に触れられないもどかしさから、声の大きさもトーンも上がってしまった。真波は少し驚いた表情を見せたが、程なく元の柔らかさを取り戻した。

「そうね……。正直、わからないの。付き合い始めたのも、彼のほうから言い出したことだし、一緒にいると楽しいし」

「でも、好きじゃないんですね」

僕の言葉は、明らかに真波の気持ちの核心を突いたようだった。

彼女はしばらくの間何も言わずに、ただ目の前の冷めたコーヒーを眺めていた。僕は少なからず後悔の念を抱いたが、後戻りができないこともわかっていたので、黙って彼女の口元を見つめた。

「ねえ、人を好きになるって、一体どういうことだと思う？」

「それは、自分自身が一番よくわかることなんじゃないですか？」

好きなものは好きだし、嫌いなものは嫌いだし」

「やっぱり高村くんは若いな。ストレートで……。私も、多分そう

だと思う。でもね、物事にはそう簡単にいかないこともあるのよ。特に人と人との問題はね」

「そうかな。わざと複雑にしているだけじゃないんですか？」

「さてと、そろそろ出ましようか？」

僕の質問を遮るようにそう切り出した真波は、半分以上残っていたコーヒーも飲まずに席を立って歩き出した。僕は、そのまま会計を済ませて店を出た彼女を追うように海岸通りに出た。

「今日はありがとう。でも、中学二年生に話すことじゃなかったわね」

「年は関係ないですよ」

「ともかく、また会えるといいわね」

その言葉を最後に、真波は僕に軽く手を振りながら駅へ向かう路地に身を隠していった。僕は、隣に漂うほのかなコロンの香りに浸りながらも、その場を離れて歩き出し、通りを横切って砂浜に下った。真波の悩みや言葉の半分も理解できなかったが、少なくとも自分の言葉に嘘はないと思っていた。真波を含めた大人たちは、物事をあえて複雑にして勝手に悩んでいるだけで、本当はストレートで単純なものであるはずなのだ。それを子供だと言っただけのところが問題なのだ。僕は自分の幼さを正当化しようと、ただそれだけで頭の中が一杯になりながらも、彼方に現れた見覚えのある顔に手を振った。

「和泉！」

そう叫びながら駆け寄ると、和泉は驚いた様子もなく、大して面白くもなさそうな表情でこちらに顔を向けた。ひとしきり波に乗った後らしく、黒いウェットスーツを身にまとった彼女の短い髪は、洗った直後のように濡れていた。

「何だ、純か」

「どうだ、今日の波は？」

「ちよっと物足りないかな。まあ、これだけすっきり晴れてるんだから仕方ないけど」

前髪をいじりながら話すのはいつものことながら、その仕草に突然女の子を感じてしまった僕は、和泉との距離感がまったく掴めなくなってしまうた。打ち寄せる波には、見透かされたような気がした。

「でも、和泉は大したもんだよ。女なのにサーフィンやってるんだから」

「女が波に乗っちゃ悪いのか？」

「いや、別にそういう意味じゃないけど」

「純こそ何暇そうにぶらぶらしてるんだよ。やることないならさっさと家に帰ればいいだろ」

「別に暇じゃないんだけどさ……。なあ、ちよつといいか？」

僕らはその場に並んで腰を下ろし、ぼんやりと真正面の曖昧な水平線を眺めた。そこは、どこまで行っても交わらないはずの空と海が渾然一体となっていて、僕はただその不思議さと神秘さをありのままに受容していた。

「何か話したいことでもあるのか？」

「なあ和泉、人と人との関係ってそんなに難しいものなのかな？」

「えっ？」

「男と女って、複雑で難しいっていうけど、それって自分たちがわざとそうしてるんじゃないかな？好きなものは好きだし、嫌いなものは嫌いだし……。違うかな？」

珍しくまともな僕の問いかけに戸惑ったのか、和泉はかなり長い間口を噤んでいた。初老の男性が、犬に引つ張られるように目の前を通り過ぎていった。

「確かにそうかもしれないけど、割り切れない部分っていうのもあるんじゃないかな。もちろん、男と女に限らないだろうけど。好きや嫌いっていつても、人によっていろいろな種類や形があるし。純だって、私とナツに対する気持ちとじゃ違うだろ？」

「でも、少なくとも俺は、和泉もナツも大好きだぜ」

「まったく同じようにか？」

確かに、和泉の言っていることは正論だった。僕は和泉もナツも好きだったが、その種類や形に違いがあることは明らかだった。でもそれは、複雑さや難しさとは別の次元のように思えた。友達としてだろうが、女の子としてだろうが、好きという事実が変わりはないからだ。

「和泉は、好きな子とかいるのか？」

「さあね。強いて言えば、海が恋人かな」

「言ってくれるな。でも不思議だな。和泉といると、まるで男友達という気がするんだ」

「男も女も関係ないだろ。だって私たちは……」

「友達だから」

僕が付け足したその一言に、和泉は白い歯を見せながら笑顔で返した。何がどうであろうが、難しい理屈は関係ないのだ。今日の前には和泉がいて、僕らは誰よりもお互いのことを理解しているのだから、それ以上のことは不要だった。打ち寄せる波の音を耳に感じながら、僕はその事実を胸一杯に受け止められる喜びを噛み締めていた。

その翌日、授業を終えた僕は昇降口で靴を履き替えると、傘を忘れた自分にうんざりしながら校門に向かって走り出した。朝方は晴れ間も覗くまざるの天気だったが、昼過ぎから降り出した雨によって、僕の楽観的な判断は脆くも崩れ去ってしまったのだ。程なく、当然のことながら水分を含んで重くなり始めた制服で走りながら鈍くした僕は諦めて足を止め、すぐ横にあった体育館で雨宿りをすることにした。通り雨とも思えなかつたが、このまま急いで帰るよりは、雨の勢いが弱くなつた瞬間を狙つて走つたほうが良いような気がしたからだ。もつとも、早く家に帰る無意味さを実感していたこともあつたのだが。

「こんな所で何やってるのよ？」

体育館の入口に佇んでいた僕に投げかけられたその言葉は、気づかないうちに背後に立っていたナツから発せられたものだった。彼女は、白地にブルーのラインが入つたバスケのユニフォーム姿で、その長い髪が後ろで束ねられていることで、普段は見ることできかない小ぶりの耳がくつきりと顔を覗かせていた。

「ああ、ちよつと雨宿り」

「まつたく、何やってるんだか。どうせ家に帰つてもすることがないから、ぶらぶらしてるんでしょ？」

「何だよそれ。まあ俺のことはいいから、さつさと練習始めろよ」「純に言われなくなつてやるわよ。あつ、ところで今晚私の家に来ない？」

願つてもない誘いだつた。子犬のようにナツに擦り寄りたかつたが、ここは努めて冷静に、声が裏返らないよう、慎重に対応することを心がけた。

「別にいいけど、何で？」

「タベクツキーを作つたから、味見してもらおうかと思つて」

「味見じゃなくて、毒見だろ？」

「まあ……いいわ。とにかく来てよね」

ナツはそう言い残すと、既に始まっていた練習の輪に入っていた。僕は、かすかに高鳴る胸の鼓動を必死に掻き消そうと、まだ弱まることのない雨の中に飛び込んでいった。それは天然のシャワーのように心地よく、次第に濡れていく制服の重さを感じることもなかった。

その夜、約束どおりナツの家を訪れた僕は、促されるままに二階にある彼女の部屋に入った。小学生の頃にはよく来ていたが、最近この場所に入るのは稀になっていた。久しぶりの空間はかつてとは異なり、女の子らしく柑橘系の色でまとめられていて、それが僕を否応なく刺激した。

「どうしたの？ 何だか顔が赤いわよ」

「いや、学校から濡れて帰ってきたから、少し熱があるのかもな」

「大丈夫？ 今、暖かいものを持ってくるから」

ナツはそう言うで一階へと降りていき、やがて二人分の紅茶と、彼女が作ったであろうクッキーの皿とともに戻ってきた。

「悪いな」

「とりあえずは、紅茶でも飲んで体を温めたら？」

僕は言われるがままに紅茶を口に含み、シナモンの香りのするハート型のクッキーを一枚食べた。

「美味しいよ」

「それ、お世辞じゃないわよね」

「何で俺が、ナツにお世辞なんか言っただ？」

「そう、よかった。お兄ちゃんも美味しいって言うてくれたけど、あんまり自信なかったから」

ナツは、嬉しいというよりもほっとした表情でクッキーの盛りられた皿を見た。そこには、ハートの他に星や三日月が無造作に散りばめられていた。

「そうだ、今日お兄さんは？」

「大学のサークルのコンパなんだって。遅くなるみたい」

「何だか寂しそうだな」

僕が言うまでもなく、ナツの表情は明らかに曇っていた。そしてそのことが僕に、ナツの兄浩樹に対する軽い嫉妬の念を抱かせ、彼女への唐突な問いかけを呼び起こした。

「ところでさ、ナツには好きな男とかいるのか」

「何よ、急に改まって」

「いや、何となく訊いてみたくてさ。ほら、俺たち幼なじみみたいなもんだからさ、何となく気になるんだよ」

「……いるわよ」

伏し目がちに呟いたナツを見て、僕の心は激しく揺さぶられた。体全体から正常な感覚がなくなり、頭の中には何も浮かんでこなかった。そう、僕はその事実を受け止めるどころか、認識すらできなかったのだ。

「同じクラスの奴か？」

「違うわ」

「じゃあ、バスケット部の奴か」

僕の予想に対して、ナツは静かに首を横に振った。同じクラスにいないことがわかったことで、少なくとも自分である確率はなくなってしまうが、部活の関係も否定されたことで、僕はナツの好きな男が誰なのか全く想像できなくなっていた。

「もういいじゃない。他の話をしない？」

その一言で、より深く訊き出そうとした僕の目論みは封じられてしまったが、それよりも、ナツに対して一直線に向かっていった自分のベクトルの行方を考えることで頭の中は一杯だった。自分の気持ちを抑えることなどできなかったが、かといってナツに想いを伝えるのも怖かった。やり場のない切なさや胸の内に秘めながら、僕はただ甘さが感じられなくなったクッキーを食べ続けるしかなかった。

でも、それだけでは居たたまれなくなってしまうた僕は、次の日の放課後、大事な話があるからと言って和泉を街に連れ出した。いつもならあつさりと断られるところだったが、余程僕の表情が曇っていたせいか和泉は快く付き合ってくれた。

「それで、大事な話って？」

「ああ、言いくいんだけどさ……」

僕らは、中心街にあるファーストフード店に、ポテトとコーラとともに身を置いていた。二階にある席の窓からは、やや西に傾きかけた太陽の柔らかい光の下で、道行く人々や車の群れがひとしきり見渡せた。いつもと同じありふれた光景ではあったが、何故だか僕にはそれがセピア色のフィルター越しに見えた。

「女のことだろ？」

「どうしてわかるんだ？」

「友達だからだよ。当たり前だろ」

「そうか……。実はさ、俺前からナツのことが好きだったんだ」

「わかってるよ、そんなこと」

うつすらと予想はしていたが、あまりにあつさりと言われてしまったので、僕の心の靄は見事なまでに吹っ切れた。改めて、和泉はかけがえのない友達だと思い知らされた。

「まったく、和泉には何も隠せないな」

「でも、話はそのことじゃないんだろ？」

「ああ。それがさ、昨日直接訊いてみたんだけど、アイツどうも好きな男がいるみたいなんだ」

「それって一体、どこの誰なんだ？」

和泉の驚き方の不自然さに一瞬たじろいだ僕は、でもその眼差しの鋭さから、コーラで一息つくこともできずに話を先に進めるしかなかった。

「具体的には訊けなかったけど、同じクラスでもバスケット部でもないらしいんだ」

「……そうか」

「どうかしたのか？」

「いや、何でもない。そうか、好きな男がいたのか」

必要以上に落ち込んで見える和泉に、僕は自分の気持ちの行方を相談できなくなってしまい、そのまま視線を窗外へと向けた。そこには太陽の位置が少し変わっただけの、最初に見た時と同じ空間が広がっているはずだったが、僕はその中に決定的に異なるものを見つけて息を呑んだ。

それはまぎれもなく真波だった。彼女は、隣にいる男性と楽しそうに話しながら人の流れに乗って歩いていった。

「あれは……ナツの兄さん」

そう呟くやいなや、僕は席を立って階段を駆け下りると、そのままの勢いで店の外に飛び出した。真波の隣にいたのが浩樹であることは疑いようがなかった。そして、二人が付き合っているであろうことも容易に想像がついた。でも、その取り合わせがあまりに意外だったために、僕はそれを確かめるために後を追おうとしたのだ。

「何だよ、急に走り出すからびっくりするじゃないか」

少し掠れた声に振り返ると、和泉が息を切らせながら、こちらを怪訝そうな目で見ていた。

「ああ、ちよつと知り合いを見かけたような気がしたから。悪かったな」

「誰を見たんだ？」

和泉にそうは尋ねられたが、僕はあえて答えを言わなかった。間違いだとは思わなかったが、話したところで和泉が真波を気にとめていないかもしれないし、まして興味があるとは思えなかったからだ。

結局その日は、目的を達することもできずに和泉と電車で帰るしかなかったが、そのことよりも僕は、どうしても真波に会って話し

たい欲求に駆られていた。彼女の付き合っている相手が友達の見え方があるという事実ではなく、浩樹のことを本当に好きなのかどうか確かめたかったのだ。もちろん確かめたところで、それ自体が無意味なのはわかっていたが、僕は純粹に気になっていたのだ。一昨日眞波が話していた男と女の、そして人間関係の複雑さのことが。だから僕は、不躰だとは思いつつも教育実習の時に配られた名簿を探し出して眞波の家に電話をかけ、二日後の夕方に会う約束をした。

「でも、急に家に電話してくるんだもの。びっくりしちゃったわ」
「迷惑でしたか？」

「ううん、そんなことないわよ」

日曜日の夕方、僕と真波は岬の公園の高台に佇んでいた。朝から太陽が顔を出さなかったせいで頬を撫でる風は冷たく、目の前の江ノ島も曇り空の中で寒そうに身を震わせていた。

「一昨日、街で先生を見かけました」

「そう」

「男の人と一緒にでしたね」

「見られちゃったんじゃ、仕方ないわね」

「その人、俺の友達の兄さんなんです」

「そうなの。世間って広いようで狭いのね……。そのことを言いに来たの？」

真波はそう尋ねながら少しだけ僕を見て、再び視線を海の向こうに戻した。彼女の着ていたベージュのコートが、深まりゆく秋をほのかに象徴していた。

「先生は、夏沢さんのことが本当に好きなんですか？」

とにかく、本当のことが知りたかった。中途半端な状況が嫌だった。白黒をはつきりつけてほしかった。真波は、寒さで少し赤くなつた頬のまま正面を見続けていた。

「……好きじゃないわよ」

予期していたこととはいえ、真波の答えは僕の心を激しく揺さぶつた。それが男と女の複雑さなのか、割り切れない人間関係の証明なのか……。堅く強張つた彼女の横顔を見つめながら、僕はただその場に立ち尽くすしかなかった。

「じゃあ、どうして付き合ってるんですか？」

「嫌いじゃないからよ。だから、浩樹から言われて、もしかしたら

好きになれるかもしれないと思って付き合ってみただけど、やっぱり駄目みたい」

「好きじゃなかったら、最初から付き合おうなんて思わないんじゃないですか？」

「私、男の人を本気で好きになつたことがないのよ」

真波の言葉を、僕はうまく理解することができなかった。いや正確に言えば、好きでもない男と付き合うこと自体が、自分の心の価値観を遥かに超えていた。

「それは……どういうことですか？」

「私ね、昔から男の人に対して嫌悪感を抱いていたの。俗っぽさっていうのか、本能的な部分が耐えられなかったの。表面を優しい言葉や態度で包んでいても、一皮向けばみんな同じ……。でも、浩樹だけは違うような気がしたの。大学のサークルで知り合つて、最近まであまり親しくはなかったんだけど、付き合い出してからいろいろなことがわかつてきたの。彼の優しさや心の広さが。だから、浩樹とならうまくいくような気がしたの。でも結局、その先には行けなかった。男と女にはなれなかったのよ」

「でも、楽しそうでしたよ。いい感じに見えたけど」

「友達としては最高よ」

真波の一言を、僕は曖昧にしか受け止められなかった。確かに、友達と恋人の間に目に見えない一線があることは理解できた。でもそれは、単なる線でしかなく、すぐに越えられる程度のものであるはずだった。分厚い壁のような絶望的な存在ではないはずなのだ。だから僕は、真波の真意を図りかね、ただ浩樹に対するかすかな同情だけを抱いた。そして、僕の漠然とした想いは翌日、ナツに対する問いかけとして、象徴的に形となって現れた。

その日の放課後、僕は部活のなかったナツと一緒に、紅く染まつた街路樹を見ながらいつもの帰り道を並んで歩いていた。自分で勝手に作ったような鼻歌を口ずさむナツは、部活がなくて早く帰れる

からか、しきりにこちらに向ける笑顔と相まって、かなり機嫌はいよいよだった。

「なあナツ、実はこの前、街でお前の兄さんを見かけたんだ」

「そう」

「女の人と一緒にだった」

「えっ……嘘でしょ？」

僕は、ナツの一瞬の表情の変化を見逃さなかった。彼女の眼差しの鋭さが、驚きの奥で必死にその事実を否定しようとしているのが手に取るようにわかった。

「六月に教育実習に来ていた海野先生と、街中を親しそうに並んで歩いてた」

「嘘よ、そんなことない。絶対にないわ」

ナツはそう叫ぶと、そのまま通りを走り去っていった。僕はその後ろ姿を黙って見送りながらも、彼女がそこまで動揺する理由がよくわからなかった。それが兄妹というものなのか、一人っ子の自分にはわからない何かがあるのか……。様々な考えが浮かんで消えていく中を、僕は再び家に向かってゆっくりと歩き出した。

それからの数日間、ナツの様子は、いつもとは明らかに違っていった。落ち込んでいたかと思うと急に明るくなったり、穏やかに話していたかと思うと急に苛ついたり、その心の不安定さが態度や行動に如実に表れていた。その原因が浩樹と真波にあることは明らかで、僕は今さらながらナツに話したことを深く後悔したが、とはいっても、そこまで気にする理由もわからないまま、悪戯に時間だけが過ぎていった。

それは金曜日の放課後だった。僕は部活のあるナツを学校に残して、和泉と二人で海に向かった。十一月に入ったばかりの砂浜は、その表情が幾分寂しくなった気はしたもののいつもと変わりなく、僕らは砂に触れるように腰を下ろすと、波打ち際で犬と戯れる少女をぼんやりと眺めた。

「なあ、最近ナツの様子おかしくないか？」

「そう言えば、ちょっと不安定な感じがするけど」

「それ、俺のせいなんだ」

視界の片隅で、こちらに向けられている和泉の視線を感じたが、それでも僕はまだ、正面にある少女の足と打ち寄せる波との接点を見ていた。

「この間俺、ナツに言ったんだ。お前の兄さんが、教育実習に来ていた海野先生と親しそうに歩いてたって。ほら、先週一緒に街に行っただろ？ あの時に見かけたんだ」

「そうか、それで急に店を飛び出したのか」

「そしたらアイツ、急に怒り出してさ。それからずっとあんな感じなんだ」

「なるほどね」

それで全てを得心したらしく、さらにゆっくりと二度頷いた和泉は、飛沫を上げてはしゃぎまわる少女に歩み寄る、母親らしき女性に目を向けていた。僕がこれ以上、何かを言う必要さえないような気がした。

「俺、何か悪いこと言ったのかな？ 正直全然わからないんだ。俺一人っ子だし、兄妹ってそんなものなのかなって思ったりもしたけど、どうも納得いかないんだよ。和泉ならわかるだろ？ 弟のいるお前なら」

「兄さんと弟じゃまた違うしな」

「そうか、そうだよな」

「でもナツの場合、本当の家族って兄さんだけだろ？ だから、兄妹の繋がりが人一倍強いんじゃないかな」

和泉の指摘は、確かに的を射ているように思えた。ナツが引越してきたのは小学三年生の時だったが、両親を交通事故で亡くした直後、僕の家の方に住んでいた叔父さんの家に引き取られたのだ。その意味で、ナツにとって本当の家族は浩樹だけであり、その動向が気になるのはむしろ当然だろう。でも僕は、何か割り切れないものを感じていた。それだけでは、到底推し量ることのできない何かがあるような気がしたからだ。

その夜、僕の家には一本の電話がかかってきた。

「高村くん、近いうちに会えないかな？ 話したいことがあるの」

真波からの突然の誘いが何を意味するのか、彼女の話したいことが一体何なのか、僕には全く予想できなかつた。だから僕は、ただその疑問を抱えながら、日曜日の夕方に岬の公園に行くしかなかつた。

「急に呼び出したりしてごめんね。でも、高村くんにはどうしても話しておきたかったから」

真波はそう言うと、伏し目がちに少し前に生えていた雑草の群れを眺めた。あたりには、一週間前よりもさらに重い鉛の雲が広がっていて、それが僕をひどく憂鬱な気分させていた。

「それで、話って何ですか？」

「この間、浩樹の妹さんに会ったの」

「ナツ……いや、純にですか？」

嫌な予感がしていた。ナツが真波と会う理由は、たった一つしかなかった。しかも、その原因を作ったのは僕自身だったのだ。

「月曜日の夜に電話があつて、どうしても会って話したいことがあるって言うから、次の日の夜に下の喫茶店で待ち合わせて」

「それで、何の話だったんですか？」

「浩樹と別れてほしいって言われたわ。お兄ちゃんは私の大事な人だからって」

「どうしてそんなことを……」

「彼女、訴えるように話してくれたわ。五年前に両親を交通事故で亡くしてから、叔父さんの家に引き取られて、それからずっと兄妹二人だけでやってきたんだって。だから、私からお兄ちゃんを取らないでほしいって」

何故そこまで兄に執着するのだろうと、一人っ子で執着する相手を持たない僕は、どうにもやり場のない想いに苛まれ始めていた。そして、そこまで慕われている浩樹への嫉妬心をさらに募らせた。

「俺がいけないんです。一週間前に先生から話を聞いた次の日に、彼女にそのことを話してしまっただけです。でも、どうしてそこまで拘るんだらう。いくら兄妹だからって、少し行き過ぎじゃないですか？」

「それが、そうでもないのよ」

その後、真波は自分の足元を見ながらしばらく押し黙った。二人の間を黄昏色の潮風が吹き抜けていったが、それでも沈黙は終わらなかった。

「私ね、浩樹と別れたの」

真波の唐突な言葉が、頭の中を駆け足で通り過ぎていった。僕は彼女の言った意味がよく理解できずに、ただその瞳の奥を見つめるしかなかった。

「この前ここで会った時、高村くん、私に言ったわよね。好きでもないのにどうして付き合ってるんだって。好きじゃなかったら最初から付き合わないはずだって。そのとおりだと思ったのよ。浩樹から言われたからとか、嫌いじゃないからとか、そういう受け身で付き合うのって、やっぱりよくないと思ったの。自分から好きじゃなかったら駄目だって。だから、浩樹に別れましょって言ったの。一昨日、高村くんに電話する少し前だったかな。それで、こうなったのは私の責任だって正直に話したの。ある出来事がきっかけで、男の人を好きになれなくなっただって。彼、わかってくれたわ」「ある出来事って何ですか？」

僕の問いかけを、真波は気づいていないようだった。いや、本当はわかっていたのかもしれないが、いずれにしても彼女はそれに答えることなく話を先に進めた。

「それでね、私が全部を話した後で、彼も少しずつ話し始めたの。

実は、俺にも隠していたことがあるって」

「それって」

「浩樹、妹さんと……純さんと関係があったの」

「……関係って」

「肉体的な関係よ。つまり……」

真波の言葉の最後まで、僕は聞き取ることをためらった。その事実はあまりにも非現実的で、ドラマ的なフィクションに満ち溢れていた。自分の友達が、それも大好きな女の子が兄と関係している……

…。それはどう考えても僕の理解を、そして常識を遙かに超えていた。

「高村くん、どうしたの？」

「いや、別に。ただ、かなりショックで」

「私も信じられなかつたわ。そんなことが現実には、しかも自分の身近な人にあつたなんてね。でもね、よく考えてみると、そういうことがあつても不思議じゃないと思うの。私だって……」

「俺、ナツが好きだつたんです」

真波の言葉を遮るように、僕は自分の正直な気持ちを打ち明けていた。それは本当に自然な行為だつた。そして、そう言わなければ耐えられないほどに、僕は次第に現実の重みをひしひしと感じ始めていた。

「ごめんなさい。だつたら私こんなこと……。知らなかつたから。」

本当にごめんなさい」

「いいんですよ。彼女に好きな人がいたのはわかつていたし、まあそれが兄さんだつたつていうのには驚いたけど」

居心地の悪そうな真波を横に見ながら、僕は改めて、自分の気持ちをナツに打ち明けようと思つていた。全てはそこから始まるような気がしていたからだ。自分と真正面に向き合つたうえで、それからナツと向き合いたかつたのだ。折りしも降り始めた雨が、二人の体をしつとりと濡らす中で、僕はただナツへの想いを心の中で確かめ続けていた。

その後二人はすぐに別れ、次第に雨足が強まる中を僕は駆け足で家に帰つたが、濡れた体を持て余して風呂に入り冷静になつてみると、今度は自分の中に隠れていた常識が頭をもたげてきた。真波と話していた時は、ナツに対する秘めた想いも手伝つて、その気持ちの高ぶりのままにナツと浩樹のことを理解した気でいたが、今こうして湯船の中で考えてみると、それはやはり不自然でよくないことだと思えてきた。確かに人と人との、とりわけ男と女の関係は複雑なのかもしれないが、度を越えた複雑さは混沌と非常識しか産み出

さなはずだった。そして、そう考えてしまった僕は確かに常識的だったが、同時にどうしようもないほどの俗物に成り下がって来たのだ。

その翌日、僕は大事な話があるからと言って、ナツを自分の家に誘った。彼女は、いつになく真剣な僕の眼差しが気になったのか、部活が終わった後に寄ることを約束してくれた。

「ここに来るの、かなり久しぶりかも」

その言葉とともにナツが僕の部屋に入ってきたのは、午後六時を少し過ぎた頃だった。

「まあ、その辺に座れよ。今飲み物でも持ってくるから」

「ああ、そんなこといいから、大事な話って一体何よ？」

「ああ……。何か音楽でも聴くか？」

居たたまれなくなった僕は慌しく立ち上がると、CDラジカセのスイツチを入れた。そうしないことには、どうにも話を切り出せなかったからだ。

「相変わらず、ZARD聴いてるのね」

「好きな音楽って、そうは変わらないからな」

「それで？」

先を促すように尋ねてくるナツを目の当たりにして、僕の頭の中は一瞬真っ白になったが、それでも何とか自分を取り戻すと、一呼吸も置かずに一気に告げた。

「俺、お前のことが好きだ」

それだけと言ってしまえば、後は楽だった。喉元を塞いでいた栓は取り払われ、奇妙な高揚感と虚脱感が体中を包み込んだ。

「えっ……。本当に？」

「五年前に初めて会った時からずっと好きだった」

「そんな……。でも私」

「わかってる。好きな男、いるんだよな？ 兄さんのこと、好きなんだろ？」

「……知ってたんだ。でも、だったらどうして」

「自分に正直になりたかったんだ。真正面から向き合って、ナツに自分の気持ちを伝えて、それからお前の力になりたかったんだ」

僕は、想いの全てを吐き出してナツに訴えかけた。たとえその真意が伝わらなくてもよかった。僕はただ、彼女の置かれている非常識な状況を何とかしたかったのだ。

「嘘でしょ？」

「えっ？」

「力になりたいなんて嘘でしょ？ 本当は、私のことを軽蔑してるのよ。兄妹でそんな関係になっている私を」

ナツはそう言う立ち上がり、そのまま駆け足で部屋を出ていった。取り残された僕は、ただ彼女の言葉を真正面から受け入れるしかなかった。ナツの言ったことは、まぎれもなく僕の本音だった。僕は、表面では理解ある人間を演じながら、心の奥底では彼女を非常識だと軽蔑していたのだ。ZARDが切ないメロディーで歌い続ける中で、僕は二面性を持つ自分にうんざりしながらも、どうしていいかわからずにベッドで蹲るしかなかった。

それから一週間、僕はナツに声をかけることができなかった。あの夜から二人の間に心の隙間ができたことは明らかで、僕は彼女と正面から向き合えない自分と、常識の壁を乗り越えられない自分の中で二重の苦悩に苛まれた。ナツと浩樹との関係を肯定すべきだと考える一方で、それを即座に否定してもいた。そして、そんな二律背反する自分に嫌気がさした僕は、思い切って和泉に相談する決心をした。

「何だよ、相談したいことって」

それは、ナツが僕の部屋を飛び出してから十日ほどが過ぎた金曜日の午後だった。学校の都合で授業は午前中で終わり、これから波に乗るといふ和泉の後を追うようにして、僕はいつもの砂浜に来ていた。黒いウェットスーツ姿の和泉は相変わらずだったが、まだ海に入っていないことで、濡れた短い髪はかすかに潮風になびいていた。

「話そうかどうかかなり迷ったんだけど、俺も、もうどうしていいかわからなくて、和泉の意見も聞きたくなくてさ」

「だから、何の話だよ？」

「ああ、ナツのことなんだけど」

「何だよ、またその話か。それで、今度は何だよ？」

呆れたような表情を見せながらも、真面目に話を聞くこととする姿勢が嬉しかった。やっぱり和泉っていいな、と思った。

「アイツに好きな男がいるっていうのは、この前話したよな？」

「誰かわかったのか？」

「兄さんなんだ」

「そうか、やっぱりな」

「何だ、知ってたのか」

何もかもをお見通しの、全知全能の神のような和泉を尊敬すると同時に、軽い嫉妬の念すら覚えた。和泉には悩みなんて何も無いような気がした。

「直接訊いたわけじゃないけど、まあ長い間付き合っていればわかるよ」

「それだけじゃなかったんだ」

「えっ？」

「その……セックスもしてたんだ」

僕がためらいがちに放った一言には、さすがの和泉も驚いたようだった。こちらを唾然とした表情で見ながら、次の言葉を発するのに少し手間取っているのが見て取れた。

「……そうか、そうだったのか」

「俺さ、二人の間にそういうことがあったというよりも、兄妹と男がイコールだっていうのがどうしようもなくひっかかるんだ。頭で理解しようとしても、何て言うか、それってやっぱり非常識じゃないかって、ナツを色眼鏡で見ちゃうんだ」

「でも、そういうことがあってもいいんじゃないかな」

「本当にそう思うか？」

「男と女は、いや人間関係ってそういうものだろ。大体何が常識で何が非常識なんだ？ どこにそんな線が引かれてるんだ？」

和泉の言い分はもつともだったが、あまりに抽象的で現実性に乏しいように思えた。今日の前で起きていることを、一般論で解決しようとしているような気がして釈然としなかった。

「それはそうだけど」

「男と女が結ばれるのが常識で、女と女が結ばれるのは非常識なのか？ そんなことどうでもいいじゃないか。自分が相手のことを好きならそれで」

「和泉、誰か好きな奴がいるのか？」

僕の問いかけに、和泉は少しためらう素振りを見せたが、やがて意を決したらしく、こちらに鋭い眼差しを向けながら言った。

「私、ナツのことが好きなんだ」

「えっ、だって……」

「私、本当は男なんだ」

和泉の一言を、僕はうまく理解することができなかった。目の前にいる彼女は明らかに女で、その小さな胸のふくらみが事実を端的に表していた。僕にはもう、波の音しか聞こえなかった。何が真実で、何が間違っているのかさえわからなかった。

「男って言ったって」

「確かに体は女だけど、中身は男なんだ」

「それって一体……」

「私さ、生まれた時からずっと、自分は男だって思ってたんだ。ピントの服を着せられたり、女らしくしなさいって言われるのも耐えられなかった。もちろん、自分の体が女であることにも。ずっと、心と体に違和感があったんだ。この体を脱ぎ捨てて、本当の男になりたいって思ってた。だから、弟が羨ましかった。どうして私が女で弟が男なんだろうって、親を恨んだりもした。仕方がないとはわかってたんだけどね」

僕の頭の中は、セメントを流し込んだように固まっていた。和泉の声はよく聞こえていたが、それを言葉に変換し、内容を理解する機能が麻痺していた。和泉の肩越しに見える江ノ島も霞んで見えた。「俺、何かうまく言えないけど」

「純は、こんな私を軽蔑するか？ 男か女かわからないような、どつちつかずの人間を」

「しないさ。確かにちよつと、いやすごく驚いたけど、少なくとも俺にとってはどつちだって構わないんだ。だって俺たちは……」

「友達だから」

僕の代わりにそう付け加えた和泉は、こちらを見ながら白い歯を見せて微笑んだ。もつとも僕の心の中では、それとは全く反対の想いに満たされていた。和泉の辛い状況を理解しようとする一方で、それを不自然でありえないことだと否定してもいた。僕は、今まで以上により深い混迷の淵に迷い込むことになり、そこから抜け出そうと必死になったが、結局のところ一人の女性に助けを求める以外に術はなかった。だから僕は翌日の夜に電話をかけ、日曜日の夕方に再び真波と会うことにした。

「こつやってここで話すのって、もう三度目だね」

「四度目ですよ」

真波の言葉を訂正した僕は、岬の公園の高台からいつものように彼方の江ノ島を眺めた。何もかもを忘れさせてくれるような遠い青空は、でも少しずつほのかな茜色に染まり始めていた。

「それで、今日は何の話？」

「俺、もう何が何だかわからなくなって……。ナツのこともそうだけど、もう一人の友達のこともあって、どうして俺の周りには、そういう人しかいないんだろって。いや、いいか悪いかなんて言うつもりもないけど、どうしてみんな普通じゃないんだろって思っで。でもそのうちに、何が普通なのか、何が常識なのかもわからなくなつて、そんな風に拘つている自分も嫌になつて」

「ちよつと待つて。浩樹の妹さんのことはともかく、詳しく話してくれない？」

真波に促されるままに、僕は和泉のことを話した。真波はただ黙つてその話を聞いていたが、僕が話し終わった後も視線を足元に落としながら、身じろぎひとつせずを考え込んでいた。

「寒くなつてきたわね。場所を変えましようか？」

真波のその一言は、これから先に続く話が長く深いものになるであろつことを予感させた。僕らは高台から下ると、以前に行った海岸通り沿いの喫茶店に向かつた。それはほんの半月ほど前のことだつたが、僕には本当に遠い昔の出来事のように感じられた。

「前に私、ある出来事がきっかけで、男の人を好きになれなくなつたつて話したわよね」

「ええ、それでナツの兄さんとも……」

「私ね、中学二年の時にレイプされたの」

真波の告白に、僕は飲もうとしていたコーヒーのカップを手にし

たまま凍りついた。それは、僕が今までに聞いた中で最も衝撃的なものだった。ナツのことよりも、そして和泉のことよりも非現実的なことだった。もう波の音も聞こえなかった。そこにあるのは限りなく虚構に近い、でも決して逃れることのできない現実だった。

「あの頃私には、仲のいい友達が二人いたわ。今の高村くんになツさんや和泉さんがいるように、いつも一緒にいるいろんな話をして……。その公園にもよく来たわ」

「その二人は男ですか？ それとも……」

「一人はセイジっていう男で、もう一人はリエっていう女だった。そして、その二人は付き合っていたの」

真波はそう言うと、少し温くなったコーヒを一口飲んだ。僕は返す言葉もなく、話の続きを待った。

「私たち三人が知り合ったのは、中学二年になったばかりの頃だった。たまたま同じクラスで、教室の席も近くて。でも、セイジとリエが付き合い出したのは、かなり後になってからよ。お互いからいろいろな相談を受けたりしてね。まあ、傍から見れば損な役回りだったのかもしれないけど、私は別に嫌じゃなかったわ。リエとはとても仲がよかつたし、大体セイジは私のタイプじゃなかったから」

真波は口元からかすかに笑みをこぼすと、少しずつ自分の記憶の扉を開けていった。

「その年の暮れだったわ。セイジから電話がかかってきて、三人で初詣に行こうって言われて、年が明けたばかりの真夜中に待ち合わせたの。でも、しばらく待ってもリエは来なかった。セイジは、電話したけど出ないから二人で行こうなんて言ったけど、最初から誘ってなんかいなかったのよ」

真波の話すトーンは、いつしか呟きのレベルまで落ちていた。でも、その声は僕の胸に強く響いていた。

「電車で街に出ただけで、まだ夜中だったし、じゃあ海に出て初日の出でも見ようって言うから、疑いもなく後をついていったの。そしたらセイジが、こっちのほうに近道だからって、途中から細い

路地に入っただけだった。少し行っただけなのに、寂れた神社があったわ。多分、最初から計画してたのね」

僕の心の中に寂しさが広がっていった。真波は……彼女は僕と同じ年にして信じる者から裏切られ、図らずも人間の本性を垣間見ってしまったのだ。

「もちろん初めてだった。でもね、変な話なんだけど、意外と私冷静だったの。すべてが終わった後に、セイジが慌てて逃げていく様子も見えてたし、しばらく経って、朝の日差しが私を眩しく照らしていたのもわかってたし……。私の十四回目の誕生日だったんだね」

真波はそこまで話すと、こちらを見ながら優しく微笑みかけた。

それはまぎれもなく、彼女の話が終わった合図だった。

「結局、三人の仲はそこで終わったわ。セイジとは、もちろんだけど、リエともうまくいなくなってる……。まあ当たり前よね」

「悔しくなかったですか？ そんな思いまでさせられて、しかも友達に」

「殺してやりたかったわ。八つ裂きにしたって足りないくらいに。その想いは今も変わっていないわ。でも、少なくともその直前まで私たちは友達だったし、セイジという人間に共感したから友達になったの。もっとも、その本性を見抜けなかった私も馬鹿だったんだけど。でも考えてみると、それが人間なのかもしれないわね。友達をレイプする人間もいれば、友達にレイプされる人間もいる。兄妹で愛し合う人間もいれば、心と体の違いに苦しむ人間もいる。何が普通で何が常識かなんて、初めから考える必要なんてないのよ。自分が普通だと考えていることでも、他の人から見たら異常かもしれないし、仮に常識というものがあっても、その中でまた常識や非常識ができたりするのよ。だから、高村くんもそうだったことには捉われずに生きてほしいの。自分が友達だと思った人を、その生き方や考え方を尊重してほしいの。だって、自分と共感できるものがあつたからこそ友達になっただけでしょ？」

真波の言葉は、真実に裏打ちされた重みに満ちていた。僕は彼女の辛い体験もさることながら、そこから自分の生き方を見出そうとしている懸命さに深く心を打たれた。

「一つ訊いていいですか？」

「何？」

「どうして、そんな大事な話を俺にしてくれたんですか？」

「高村くんなら、私の話を、考え方をわかってくれようような気がしたの。何故かって言われるとうまく答えられないんだけど、六月にあなたと初めて会った時から何となく感じてたの。お互いに一人っ子だっていうのもあるんだろうけど」

「それで、結果はどうでした？」

「それはもうわかってるでしょ？」

真波は僕に確信を持って尋ねているようだった。そして、それは見事に正しかった。僕は彼女の想いを理解し、また共感を覚えていた。思えば初めて会ったあの時から、僕は何かある度に真波に相談していたのだ。理解してくれれば、共感してくれればと信じていたから。

その後話の途切れた僕らは、どちらからともなく店を出て海岸通りを横切り、既に夜の闇に紛れてしまった海を見ながら砂浜に下った。僕は、真波との隙間を埋めるようにその薄い手を握ると、二人で肩を寄せ合うように砂を踏みしめて歩いた。程なく刺すように冷たい風が僕らを襲い、彼女の髪を、そして黒いコートの裾を激しく揺らした。

「寒いわね」

そう呟いてコートの襟を高くした真波の視線が、彼方に佇んでいるはずの江ノ島に向けられているのかどうかまではわからなかった。あるいはそれは、中学二年の自分に向けられているのかもしれない。あった。

「どうして中学校の先生になろうと思ったんですか？　そういう出来事があったのなら、普通学校からは離れたいと思うんじゃないですか？」

「普通じゃないからよ」

今さらながら、『普通』という言葉を使った自分に嫌気がさしていた。真波の言葉に、皮肉が込められているような気さえた。

「子供たちに、私のこの切なる想いを伝えたかったの。教育を通じてね」

「そうなんですか」

「嘘よ」

言いたくないのなら、それでもいいと思っていた。そもそも初めから、先生になろうとする理由など訊きたいわけでもなかった。ただ僕は、真実の真波が知りたかったのだ。彼女の想いを純粹に理解し、共感したかったのだ。

「逃げたくなかったの。あの時から、私の心の時計は止まったままなのよ。だからもう一度やり直したかったの。中学生と接すること

で、彼らの想いを追体験したかったの。そうしないと、これからの私になくなっちゃうのよ。だって悔しいじゃない。私は体と一緒に人生も犯されたのよ。このままじゃ、私はどこにもいけないわ。私がかわいそうよ」

真波はそれでもなお、彼方に広がる自分の闇を見ているようだった。決して這い出ることできない、底なし沼のような世界を。

「俺にも手伝わせてくれませんか？」

それは自然に発せられた言葉だった。そこには理屈も常識もなかった。そう言わずにはいられない自分がいるだけだった。

「俺と一緒にやり直しませんか？ 失くした年月を埋め合わせませんか？」

「それ、本気で言ってるの？」

「俺が嘘でそんなことを言う人間に見えますか？」

「そうは思わないけど」

ただ、真波と一緒に歩き続けたかった。同じ時間を共有したかった。だから、目の前の石ころ一つも取り除きたかった。

「年のことは言わせませんよ」

「年なんか関係ないって言ったものね」

「それに、俺たち一人っ子同士だし」

僕は真波の手を取っていた自分の右手を、彼女の揺れる髪にそっと触れさせた。そして勢いのままに、お互いの唇同士をそっと触れ合わせた。お互いの舌を絡ませ合った。全ては始めから、仕組まれていたかのように思えた。その意味で僕らは根源的に、いやほとんど宿命的に結ばれていたのかもしれない。なかった。

その後、頬を伝う海風に再び寒さを感じた僕は、真波の中からそっと抜け出すと、海岸通りから少し入ったホテルに向かって歩き出した。そうすることが正しいかどうかなど、僕はもう考えていなかった。たとえそれが圧倒的に非常識だったとしても、少なくとも今僕は、それを心から望んでいたのだから。

「ねえ、後悔してない？」

真波の一言が、真つ暗なホテルの部屋中に響き渡った。彼女は、窓から闇の世界に沈んでいる海を眺めていた。僕はベッドに腰を下ろしながら、彼女が背負う深い哀しみをその後ろ姿に見ていた。

「何をですか？ 二人の年が離れていることですか？ それとも、先生と生徒がこうなったことをですか？」

意地が悪いと思いつつも、そう言わずにはいられなかった。真波の気持ちを確かめたいというよりも、今現実に共有している時間の流れを楽しみたかった。

「年の差は関係ないわ。それに、前にも言ったでしょ？ 私はまだ先生じゃないわ。その卵よ」

「じゃあ何ですか？」

「あなたはまだ若いわ。これからいろいろな人と出会って、様々な経験をすると思うの。でも、その前に私のような人間と……」

「本当の先生みたいなことを言うんですね。仮に、もしそうだったとしても、先生との出会いだって経験じゃないですか。それに、少なくとも俺は、今先生を求めています」

これからのことは、これから決めればいいと思っていた。時間は十分にあるのだから、ゆっくり考えればいいのだ。大切なのは今、この一瞬なのだ。考える前に行動しなければ手遅れになりかねない現在を逃して、後悔だけはしたくなかった。

「わかってるわ。でも、本当に後悔させたくないの。私は多分、あ

あなたが思っているような人間じゃないわ。いずれあなたは間違いない、私を持って余すようになるわ」

「それでもいいじゃないですか。先のことを考えてたら何もできないですよ。今を大切に生きればいいじゃないですか」

「やっぱりあなたは若いわ」

真波の呟きを、僕はその後ろで聞いていた。自分の若さがどういうものなのかわからなかったが、今はそれを考える気も余裕もなかった。目の前に真波がいることが全てだった。それで十分だった。僕は彼女をきつく抱き締め、ベッドに横たわった二人は、お互いの体の隅々までを貪欲に確かめ合った。波の音は聞こえなかったが、僕は真波と重なり合いながら、その耳に彼女の心の叫びをはっきりと聞き取っていた。

でも、現実的に目を覚ました時、既に彼女の姿はなかった。時計は午前三時を示していて、隣には彼女が残したベッドの僅かなくほみがあるだけだった。僕は夕べの出来事を思い起こしてみたが、それは何の結論も導き出さなかった。もちろん後悔などは毛頭なかったが、僕は真波の唇に、そして柔らかな白い肌にリアルな感触を見出せなかった。もっとも、しばらくしてそれが真夜中の闇と静けさの影響だとわかると、僕は味のないコップ一杯の水を一気に飲み、それから再びベッドの中に潜り込んだ。夜明けまでにはまだ時間がたっぷりあったからだ。

その後の一ヶ月は奇妙な毎日だった。真波を抱いたあの日から、自分の目の前にあるもの全てが二重に見え、その存在感が希薄になったような気がした。ナツとは相変わらずすれ違いの日々が続き、僕はそこに居心地の悪さを感じながらも、和泉と話をすることで一時的に自分の心のバランスを保った。でもそれは、根本的な解決にはならなかった。真波に会うために何度も電話をしたが、ただの一度も繋がることはなかった。僕は、あの日以来真波に会えないことに苛立ち、そのやり場のない想いに苛まれたが、無造作に流れていく時間を止めることはできなかった。

それは、十二月半ばのある寒い日曜日だった。期末試験の終わっていた僕は、クラスの仲間と街で遊んだ後、駅へ向かって家路を急いでいた。腕時計の針は午後九時を指し示していて、僕らは寒さが体に行き渡らないように早足で舗道を進んでいた。

「あれは……」

その光景は唐突に目の前に現れた。そこはラブホテルで、ちょうど二人連れが中に入ろうとしているところだった。でも僕が驚いたのは、それが女性同士であったことよりも、その一人の顔をはつきりと見てしまったことであつた。

「ちよつと待つて！」

気がつくとも反射的に叫んでいた。周りの仲間たちの視線も関係なかつた。その女性が真波であることに間違ひなかつた。彼女は僕の声に気づいてこちらを向き、そのまま凍りついたように動かなかつた。それが一秒だつたのか一分だつたのかはわからなかつたが、次の瞬間連れの女性を引っ張るようにして、足早にホテルの中に入つていった。

「おい、何大声出してんだよ」

仲間の声で我に返つた僕は、周りが真波に気づかなかつたことに胸を撫で下ろしたが、同時に次々と押し寄せてくる疑問の渦に呑み込まれそうになつていた。真波がラブホテルに入つていったことはもとより、何故相手が女性だつたのかわからなかつた。いや、うつすらと想像はできたのだが、その事実を認めたくなかつたのだ。

彼女が、過去の苦い経験から男性を好きになれなくなり、その活路を女性に見出したとしても、それはやむをえないことなのかもしれないなかつた。でも、だつたら自分の存在は何なのか、一ヶ月前の出来事は何だつたのかと考えると、僕は何もかもを投げ出したいようなやるせなさを感じた。真波は僕を裏切つていたのか……。再び何が真実なのかわからなくなつた僕は、最後の救いを求めるべく、次の日の放課後に全てを和泉に話す決心をした。

月曜日の岬の公園には青空が広がっていたが、真冬の訪れとともに夕暮れが一層早くなり、午後四時を過ぎたばかりではあったが、高台から見える江ノ島は既に黒い影になりつつあった。

「それで？ またナツの話か？」

「いや、今日は違うんだ。海野先生のことなんだ」

「ああ、ナツの兄さんの彼女だろ？」

「実は俺、彼女と……」

「彼女とって……まさか」

和泉にはそれだけで十分なようだった。僕はただ、言葉の代わりにぎこちなく頷いた。海岸通りを走る車のクラクションが遠くに聞こえた。

「ナツの兄さんとは、もう別れたんだ」

「好きなのか？ 海野先生のこと」

「わかり合えるんだ、お互いに。共感できるんだ」

「それじゃあ答えになってないよ。好きじゃないのか？」

和泉の苛立つ声が、僕の胸に鈍く突き刺さった。それは、いつか僕が真波に放った言葉と同じだった。

「わからない」

「わからないって……」

「もう何が何だかわからないんだよ。誰が好きで誰が嫌いなのか、何が普通で何が異常なのか。先生、昨日ラブホテルに入っていたんだ。しかも女の人と」

僕の訴えるような叫びは、確実に和泉に届いているはずだった。届かなくても容易に察しているはずだった。でも和泉は、すぐにはその答えを僕にもたらしはくれなかった。

「純は、先生を必要としてるんだろ？ 好きかどうかはともかく」

僕は即座に首を縦に振った。

「多分、先生も純を必要としてると思う。それは間違いないよ。でも、十分じゃなかったんだ。純だけじゃ満足できなかったんだ。理不尽かもしれない。でも、それを責めても仕方がないと思うんだ。純だって、先生だけで十分だって、すべてだって言い切れるか？」

和泉にそう尋ねられると、僕には返す言葉がなかった。相手のことを必要としていても、それだけでは満足できない人間の真実が、僕の心臓に一本の矢となって突きつけられていた。でも、僕はどうしても納得できなかった。そしてその意味で、僕はやはり幼い十四歳でしかなかった。

僕らはその後、彼方に沈んでいく江ノ島をひとしきり眺め、お互いに言葉もないままに別れたが、家に帰ってからも、僕は昨日の夜に見かけた真波の姿と、少し前に放たれた和泉の言葉の狭間で身動きが取れなくなっていた。和泉の言うとおりだったとしても、真波にとつて僕の存在だけでは不十分だったとしても、他の誰かとホテルに入る理由にはならないはずだった。確かに僕らは、恋愛感情を持った一対の男女として付き合っているわけではなく、お互いが手を束縛するのは理不尽かもしれないが、少なくとも彼女が誰かと、特に女性と深い関係になるのなら、そこに何らかの必然性が必要ならぬのだ。そうでなければ、一ヶ月前の夜の出来事の価値がなくなってしまうのだ。頭の中がそうしたためくるめく想いはちきれそうになってしまった僕は、その解決のために何度も真波に電話をしたが、やはり一度として繋がることはなかった。彼女の家に向こうかとも思ったが、両親が出てきたら自分をどう紹介していいのかがわからずに押し留まった。僕は限りなく閉塞した世界で孤立し、その出口を見出そうと懸命に足掻いたが、結局のところそれはただの独りよがりでしかなかった。

やがて年が改まり、僕の家にもそれなりに年賀状が配達されてきた。でも、その中に大きさの異なる一通の封書を見た瞬間、僕は反射的に手の指で封をこじ開け、便箋に書かれていた神経質そうな字を貪るように目で追った。それはまぎれもなく真波からのものだった。

高村くんへ

こんにちは。いえ、明けましておめでとうかな。

ごめんなさい、そんなことを言っている場合じゃないわね。こちらから連絡しなかったことを許してください。何度か家に電話があったことは、母親から聞いてわかっていました。でも、どうしてもあなたとは話せませんでした。話せば必ず会うことになるし、そうすれば面と向かっていろいろなことをあなたに説明しなければならなくなる……。それが怖くて無視していました。本当にごめんなさい。でも、やはりあなたには何らかの形で説明をしなければいけないと思つて手紙を書きました。

あの夜からあなたと会わなかったことには理由があります。あなたのことを好きになつて、だからホテルで一夜を過ごしたことは決して後悔していません。おそらくもう一度同じ状況になつたとしても同じ結果になるでしょう。ただあの夜、私は感じませんでした。あなたと交わつていても、胸に風穴が開いたような虚しさが広がっていただけでした。でも勘違いしないでください。これはあなたではなく私の責任です。年の差も関係ありません。浩樹とも何度かしたんだけど、その時も感じませんでした。私の体は、男の人に対して反応しないのです。過去の体験がそうさせたのかどうかは自分でもわからないのだけど、私にはそういった免疫ができてしまつたようです。だから、結果的に私は女の人と交わることでしか自分

の体を満たせなくなってしまう。半月ほど前に、街であなたに見かけられた時もショックでしたが、今思えばそれでよかったのかもしれない。唐突ではあれ、あなたは私の本質を見ることができたのだから。

ともあれこれは、私の言い訳に過ぎません。あなたが私の本質を知って、裏切られた想いや嫌悪感を抱いたとしても、それは当然のことだと思えます。たとえあなたがそれでも私を理解し、すべてを受け止めてくれたとしても、おそらくうまくはいかないでしょう。でも、これだけは信じてください。あなたは、今まで私が知り合ってきた男性の中で最高の人でした。心を通わせ合い、様々な想いを共有できる唯一の人間でした。すべては私自身の問題であり、責任も私にあります。だから、自分を決して責めないでください。自分を否定しないでください。あなたは限りなく普通で、そして常識的です。

最後に、この手紙があなたのもとに届く頃には年も改まり、私もこの世界にはいないでしょう。もうすべてに疲れしました。今までの自分にも、これからの人生にも……。何度もやり直そうと思いましたが、一度狂ってしまった生き方は、そう簡単に元には戻らないようです。自分の誕生日である一月一日に命を絶つのも運命かもしれません。せめてもの救いは、あなたと出会えたことでしょう。

あなたに感謝しています。

では、さようなら。同じ一人っ子として、そしてZARDが好き
な人間として、私の分まで生きてください。

僕はその手紙を繰り返し読み返した後、自分でも訳がわからなくなつてそのまま家を飛び出した。海岸通りを走っても、波の音は聞こえなかった。ただ涙がとめどなく溢れてきて、目の前の視界をぼやかすだけだった。

気がつくと、岬の公園の高台に佇んでいた。彼方には、今年も江ノ島が晴れやかに顔を覗かせていたが、僕はもはやその姿を見ては

いなかった。その向こうに、真波の影を懸命に探そうとしているだけだった。頬を伝っていた涙は既に消えていたが、全身を虚脱感と虚無感が覆い尽くしていた。彼女の懸命な想いを一握りでも理解し、そして受け止めることができたなら……。僕は生まれて初めて深い無力感を抱き、十四歳である自分の幼さに絶望した。でも、全ては既に遅かった。彼女は……。真波は、僕の目の前から永久にその姿を消してしまったのだ。

真波の死体は、それから一週間後に七里ヶ浜で発見された。波乗りをしようとしていた和泉が見つけ、僕が聞かされたのはその夜、家でZARDを聴いている時だった。

そうして永い記憶の旅から舞い戻ると、二十歳の僕は灰色の墓石を眺めながら佇んでいた。真波が白い灰となってこの下に眠ってからの六年は、僕にとって本当に無意味で無価値な歲月だった。目の前の出来事が全て嘘に思え、繰り返される日常は透明で存在感が希薄だった。もつとも、緩やかだが確実に前へと進む時の流れは、僕とその周囲を決して待ってはくれなかった。ナツは、僕との居心地の悪い関係を残したまま、中学卒業と同時に、ひと足早く都心で一人暮らしをしていた兄浩樹のもとへ行った。そして和泉とは、同じ高校に進学してからも親友として数多くの時を過ごしたが、卒業して僕が都心の大学へ進学したことで離れ離れになった。高校の三年間はどことなく重苦しく、岬の公園の高台に行く度に、そしてZARDが新曲を出す度に胸が鈍く痛んだ。ある女の子と一年程度付き合ったこともあったが、何百時間言葉を交わしても、何度となく体を重ね合わせても、心に空いた絶望的な風穴を埋めることはできなかった。そんな僕にとって唯一の救いは、他でもない和泉の存在だった。僕らはお互いの欠けた一部分を補うかのように支え合い、同じ価値観を共有し合った。でも、高校を卒業して大学に入ってから、クラスやサークルの仲間には決して心を開かず、自分だけの、いや真波とのささやかで非現実な世界に身を置き続けた。それが自分をいい方向に導かないことは十分にわかっていたが、僕はただ他人との不用意な関わりを恐れていたのだ。そしてその意味で、僕は十四歳の自分に安住の地を求め続け、現状からの逃避をひたすらに望んでいた。

雲の隙間から恥ずかしそうに顔を覗かせる新年の太陽は穏やかで優しくだったが、不意に背後から肩を叩かれて振り向いた僕は、そんな安らいだ気持ちやさざ波が立ったように乱された。かなり久しぶりに見る姿は、それほどまでに意外なものだった。

「久しぶりだな」

そこに立っていたのは浩樹だった。二十八歳になっているはずの彼は、相変わらず僕より背が高く、スーツにネクタイ、それにロングコートを全て黒にまとめて着込んでいた。短い髪は整髪料で固められ、大学時代と比べると別人のように見えたが、こちらに注がれる柔らかな眼差しと、笑みを見せるために緩めた口元は明らかに昔のままだった。

「どうも、こんにちは」

「大きくなっただな」

浩樹は感心しながらそう言って、僕の頭を軽く撫でた。あまりいい気はしなかったが、彼にとって僕は、やはり中学二年生のままだと見えるのだろう。

僕らは、そのように挨拶を済ますと、立ち話も何だからと、かつて何度となく通った海岸通り沿いの喫茶店に向かつて歩き出した。正月とあって店の入口には『準備中』の札が掲げられていたが、浩樹が店の勝手口らしい所から話をする、程なく扉が開いて中に入る事ができた。

「このオーナーとは知り合いなんだ」

浩樹はその言葉とともに、春の木漏れ日のような笑顔をこちらに投げかけた。程なくコーヒーが運ばれてきて、僕らは改めて二人だけの空間で話をする事になった。

「真波がいなくなっただけから、もう六年になるんだよな」

「毎年来てるんですか？」

「ああ、俺にとっては大切な人だったからな。彼女のことは、今でも忘れることができないよ」

「俺もです」

「好きだったのか？」

浩樹にストリートに訊かれた僕は、言葉の代わりに深く頷いた。

その後二人の間に沈黙が広がったが、決して重苦しいものではなかった。むしろ、その時テーブルに注がれていた日差しのように柔ら

かいものだった。

「ところで、純は今、何してるんだ？ 大学に行ってるのか？」

「ええ、都心で一人暮らしをしながら」

「そうか。じゃあ今度俺の家に遊びに来いよ」

「今も、ナツ……いや純と一緒に住んでいるんですか？」

「いや。純は、高校を卒業すると同時に出ていったんだ。今は大学に通いながら一人暮らしをしてるよ」

「そうなんですか」

気負い込んで訊いたわりには、先へ続く言葉が見つからずにつつむくしかなかった。自分から言い出したこととはいえ、ナツのことを持ち出したことで、二人の『非常識』な関係を思い起こしてしまっただけでもあった。もちろん今さら、それについて僕がこれ以上訊くことはあまりにも不躰で無意味であり、またその資格もないと思っただ。

「ああ、そうだ。実は俺、来月結婚することになったんだ」

「えっ、まさか……」

浩樹の唐突な一言に、僕は反射的にナツの名前を口から出しそうになったが、辛うじてそれを飲み込むことに成功した。落ち着いて考えてみれば、彼が妹と結婚できるはずもなく、僕は早とちりな自分を窘めながらも、ナツの切ない想いを感じてかすかな哀しみが胸に広がった。

「そんなに驚かなくてもいいだろ？ 俺だってもういい歳なんだから」

「そうですね。おめでとございます」

「それで、もちろん式には出てくれるよな」

「出席してもいいんですか？」

「当たり前だろ？ 大切な妹の親友なんだから」

浩樹はそう言つと、残っていたコーヒーを一気に飲み干した後で再び微笑んだ。でも僕は、それに対して笑顔で返すことができなかった。浩樹が放った「親友」の一言が、僕の頭をひたすらに駆け巡

っていた。そう、僕とナツは小さな頃からいつも一緒に幼馴染のよ
うなものだったし、淡い恋心を抱きながらも様々な出来事を共有し
合ってきたのだ。僕とナツは、いや和泉を含めた三人はまぎれもな
く親友であり、決して切れることのない固い絆で結ばれているはず
なのだ。僕は改めてナツという存在の重みを感じ、できるだけ早く
その絡まった糸を解きほぐそうと決意していた。

浩樹とはその後すぐに別れたが、僕にはもう一ヶ所訪れるべき場所があった。そこは喫茶店から海岸通り沿いに十分ほど歩いたサーフショップで、僕がその脇の狭い階段を二階へ上がって色褪せた青い扉を叩くと、中から懐かしい声とともにその顔が現れた。

「よお、待ってたんだ。上がれよ」

和泉の言葉に後押しされるように部屋に入ると、そこには青と白の二色でまとめられたワンルームが広がり、三方を取り囲んだガラスの壁の向こうには、少し寒々としていたが穏やかな海が顔を覗かせていた。

「へえ、いい部屋じゃないか」

「ちよつと殺風景だけどな。まあ、一人で暮らすにはちょうどいいよ」

そう言うてはにかんだ笑顔を浮かべる和泉は、昔と同じように額にかかった短い髪の毛をいじった。高校卒業以来だったが、白いトレーナー姿が珍しかったこと以外は特に何も変わっていなかった。和泉は、高校卒業後間もなくこのサーフショップで働き出し、ただ同然の家賃でここに住んでいた。波乗りが好きだったことを考えれば当然のことかもしれないが、それでも僕は和泉が大学に行かないことに少なからず驚いた。

「相変わらず波に乗ってるのか？」

「まあな」

「でも意外だったぜ。大学に行かないなんてさ」

「そうかな？ もともと興味なかったし」

「でも、先のことを考えたら、好きなことばかりやってもいられないぜ」

言い終わってから、しまったと思った。常識的に立ち入り過ぎたと思った。まるで親のような言い草に後悔して、視線を足元に落と

した。

「相変わらずだな、純らしいよ。それはそうと、もう墓参りには行ってきたのか？」

「ああ、ついさっきな」

「早いもんだよな。あれからもう六年経つんだから」

「墓の前で、ナツの兄さんに会ったんだ。来月結婚するらしいぜ」

「結婚つてまさか」

少し前の自分のように驚いた表情を浮かべる和泉がおかしかったもつとも、そこで勿体つけるほど、僕も会話の駆け引きがうまくはなかった。

「俺も勘違いしたよ。もちろんナツじゃないさ。でも、それを聞いて思い出したんだ。あのままナツと離れ離れになってたことを」

「ナツ、今頃どうしてるかな」

僕から視線を外して、目の前に広がる海へと向けた和泉の姿が全てを物語っていた。今こそ、失くした三分の一を探しに行かなければならなかった。かけがえのない、ナツという名の親友を見つけなければならなかった。

「なあ、ナツに会いにいこうぜ。アイツ今、都心で一人暮らししてるみたいなんだ。詳しい場所はよく知らないけど、兄さんの結婚式に行けば必ず会えるからさ」

僕の誘いに対する和泉の言葉はなかったが、小さく頷いたその表情から答えは明らかだった。ガラス越しに煌く水平線の彼方を見ながら僕は、三人の新たな友情の始まりに高鳴る胸の鼓動を抑えることができずにいた。

浩樹の結婚式はすぐにやってきた。二月も半ばを過ぎた日曜日、僕は途中の駅で和泉と落ち合うと、薄い青空が広がる下を式場に向かった。そこは都心にある小さな教会で、中に入って周囲を見渡すと、最前列に座るナツの後ろ姿がすぐに確認できた。僕らは早速ナツのもとに向かうと、久しぶりの挨拶もそこそこに三人で抱き合っ

て再会を喜んだ。六年ぶりに見るナツは、亜麻色の髪や大きな黒い瞳こそ昔のままだったが、頬から顎にわたる線の鋭さは、彼女が大人の階段を何歩か上ったことを端的に示していた。僕は今まで感じていた心のわだかまりをよそに、一刻も早く失われた時の流れを取り戻したい衝動に駆られたが、程なく始まった式によってその想いを中断せざるをえなかった。

やがて、二人の祝宴は近くのホテルへと移ったが、僕ら三人は、いや少なくとも僕とナツとは、あまり話す時間を共有できなかった。いざ面と向かって話そうとしても、思うように言いたいことが口にできず、ましてや謝罪の言葉などかけらも出てこなかった。僕は、隣で楽しそうに話すナツと和泉の姿を見ながら、まだ過去のわだかまりを引きずっている自分に愕然とし、既に六年の時を経ているにもかかわらず、いとも簡単に打ち解けている和泉が羨ましかった。

「ああ、疲れた」

「本当だな」

「三人で飲み直そうか？」

その時、僕ら三人は午後八時を過ぎたナツの部屋に身を置いていた。僕と和泉の放った言葉の先を把握したかのようにそう言ったナツは、キッチンから白ワインのボトルとグラスを三つ抱えて、ベッドの前にあるガラステーブルに置いた。ワンルームのその空間は見事に暖色系でまとめられ、僕らはピンクに染まったベッドカバーの上に並んで座っていた。

「でももう夜の八時だし、そろそろ帰らないと」

「何言ってるのよ。久しぶりに会ったんだから、今夜はゆっくりと話しましょうよ。二人ともここに泊まっていけばいいんだから」

「でも、女の子の部屋に泊まるのよな」

と、心にもないことを言った途端に笑いが込み上げてきた。もちろん、一応言ってみただけで、全ては織り込み済みだった。

「純は相変わらずね。あなたが私を襲うなんて思ってないわよ。昔からの仲なんだから」

「そうだよ。なあ、泊まっていこうぜ」

形ばかりの躊躇いを見せる僕を誘った和泉は、三つのグラスに次々とワインを注いで乾杯の用意をした。

「じゃあ、そういうことで。三人の再会を祝して、乾杯！」

「ちよつと待った」

「純、今度は何よ？」

乾杯を遮られて慥然とするナツに向かって、僕はこの瞬間しかないと思ひ、今まで胸につかえ続けてきた想いを打ち明けることにした。

「ナツ、六年前はごめんな。俺、お前の気持ちをわかってやれなく

て、友達として恥ずかしいよ。だから遅すぎるかもしれないけど、一度はつきりと謝っておきたかったんだ。本当にごめん」

「もう昔のことはいいじゃない。また三人でこうして会えたんだから、それで十分よ。そんなことで謝らなくてもいいわ。だって私たちは……」

「友達だから」

ナツの言葉の最後を補った和泉に呼応するように、僕ら三人はグラスを重ね合わせた。新たに始まる友情を確認するための象徴的な行為として。

「でも、本当に久しぶりだな」

「六年ぶりなものね。でも、純も和泉も変わってないね」

「それって、喜んでいいのかな？」

少しずつ過去を思い出しながら感慨深げに言った僕に続いて出たナツの言葉に、和泉がこちらを見ながらそう尋ねてきた。僕は和泉に向かって軽く頷いた後、女の子から女性へと変わったナツを眩しく見ながら言った。

「ナツは変わったな。何て言うか、女らしくなったよ。もしかして彼氏とかいるんじゃないの？」

その不用意な発言にナツは表情を曇らせ、僕自身も一瞬にして激しい後悔の念に襲われたが、続いて発せられた和泉の一言がその場の重苦しい雰囲気を見事に救った。

「そういう純こそどうなんだよ。高校の時に付き合ってたあの子、名前何て言ってたっけ？」

「その話知らないわ。ねえ和泉聞かせてよ」

「和泉、話すんじゃないぞ。話したら絶交だからな」

僕の形ばかりの警告も空しく、それから和泉はナツに延々と話して聞かせた。その頃の僕は、その子のことと和泉に何度も相談していたので、全てを話しそうな勢いに自分の顔が次第に熱くなっていくのがわかったが、一方で心を許せる友達との他愛ない会話に、久しぶりの充足感と満足感を抱いてもいた。

やがて話し疲れたのか、和泉はそのままベッドに横たわり静かな
寝息を立て始めた。あるいは単に飲み過ぎただけなのかもしれないが、
つたが、いずれにしてもその瞬間から、僕とナツは必然的に二人だ
けで話をする事になった。

「ねえ純、六年前に言ったこと、まだ覚えてる？」

「ああ、あの時は本当にすまなかった。お兄さんとのこといきなり
訊いたりして」

「ううん、そのことじゃなくて……。私のことを好きだって言うて
くれたことよ」

ナツから改めて、今さらながら言われてみると、僕にはもう返す
べき言葉が見当たらなかった。ただ照れ隠しに、グラスのワインを
一気飲みするしかなかった。

「嬉しかったわ、とても。あの時は、お兄ちゃんとのこともあつた
からあんな風に言っちゃったけど、本当はとても嬉しかったのよ。

ねえ、今もその気持ち変わらない？」

「ナツ、お前酔ってるだろ」

「かもね。でも、今なら私素直に言えるわ。純のこと好きだって
いつしか僕に肩を寄せるナツは、真っ赤な顔をさらに赤くしてそ
う告げた。僕は、その言葉に胸のすくような喜びを感じたが、その
勢いのままに彼女を抱き寄せることはできなかった。今日の再会に
よって、確かに六年間の二人の溝は埋められたが、かといって現状
から逃れるわけにはいかなかった。そう、当然のことながら僕らは
明らかに別々の時を刻み続けてきたのだ。複雑な人生のジグソーパ
ズルは、そうは容易く完成できないはずなのだ。そしてそのことは、
他でもないナツ自身が一番よくわかっていているはずだった。

翌日、軽い朝食を済ませた後、僕と和泉はそれぞれの場所へ戻るべく、ナツの部屋を出て近くの駅に向かった。ナツは僕らを送ろうと一緒についてきたが、口数こそ少ないもののあまりにもさっぱりとしたその態度に、僕は夕べのことが夢であるかのような錯覚に陥った。あの時確かにナツは、僕のことを好きだと言ったのだ。そしてその告白に、僕は胸が打ち震えるような感動を覚えたのだ。決して夢であつてほしくはなかった。でも結局のところ、夢であれ現実であれ、僕の取るべき選択肢は一つしかないはずだった。

僕は駅でナツと別れ、更に鎌倉に戻る和泉と別れると、そのまま電車を乗り継いで自分の部屋へと戻った。僕のアパートは中野の北の方の西武線沿いであり、小田急線沿いにあるナツのアパートからは新宿で乗り継いで四十分ほどかかった。一旦家に帰った僕は、シャワーを浴びて丁寧に髭を剃ると、服を着替えて再び新宿まで戻った。昼の十二時に人と待ち合わせていたためだったが、街はそんな僕とは無関係に容赦ない時の流れを刻んでいた。僕は既に長い春休みに入っていたが、周囲に漂う雰囲気はまぎれもなく普通の月曜日のものであった。働く人々が舗道を激しく行き来し、僕はその光景に少なからず後ろめたさを感じたが、待ち合わせ場所の喫茶店に入つてその顔を見つけた頃には、いつもの自分の世界に身を置きながら口元を緩めていた。

「五分遅刻ね」

少し神経質そうな笑みを浮かべて僕を軽く窘めた香田穂波は、同じ大学に通うクラスメイトで、一年近く前から僕と付き合っていた彼女と知り合つたのは高校二年の時で、それは夕べ和泉が延々と話していた子に他ならなかった。当時の僕が穂波に惹かれたのは、お互いにZARDが好きだったこともあつたが、何よりも何気ない仕事や雰囲気、草や真波に似ていたからだ。僕は無意識のうちに、半

ば強引に穂波と真波を重ね合わせようとしていたのだ。でも、当然のことながら二人は別人であり、進級と同時に別のクラスになったこともあって別れた。僕は真波を引きずり続ける自分に愕然とし、そのことで穂波を傷つけたことを激しく後悔したが、真波に次いで彼女をも失ってしまった事実に関身に更なる損ねてしまった。やがて大学に入った僕は、フランス語のクラスで偶然にも穂波を見つけ、お互いが成長したこともあったが、以前とは違う感覚で彼女と接することができ、新しい男と女として付き合えるようになった。それが僕の、一年の浪人生活に由来しているかどうかはわからなかったが、僕はその間に過去の自分を、身の回りに起きた様々な出来事を改めて整理し、時のアルバムにしまい込んだ。その試みはある程度成功した。もちろん、穂波自身の変化も大きかったが、いずれにしても僕は、ようやく真波から独立することができたと思っていた。

「そんな所で何ぼんやりしてるのよ。早く座ればいいじゃない」

「ああ、そうだな」

記憶の糸を手繰り寄せていた僕は、穂波の不躰な一言でようやく現実に立ち返ることができた。彼女の切れ長の目尻はほんの少し上がり、小ぶりの唇とともに表情の薄さを見事に象徴していた。背中まである長い髪がやや茶色く染められていることを除けば、その姿に高校時代の面影がかなり色濃く残されていた。

「何にする？」

「俺はコーヒー」

「違うわよ、これから見る映画のことよ。今日の純、ちょっと変よ」

苛立ちながら怪訝な表情を浮かべる穂波の前に、僕は既に自分の心のベクトルがぶれ始めていることに気づいていた。一体俺はどこへ向かおうとしているのか。無表情に交差点を行き交う人々を窓越しに眺めながら、僕はノアの箱舟のように揺れ動く自分を図りかねていた。

僕らは、口数も少ないままお互いにコーヒーを飲んだ後、近くの

映画館で恋愛ものの映画を見た。それは無名の俳優を使った無名のフランス映画で、僕は最初の数分でハリウッドのアクションものになかったことを後悔したが、スクリーンを見つめる穂波の眼差しは真剣そのものだった。彼女の手には黄色いハンカチが強く握り締められていて、僕は結局その手をぼんやりと見ながら大半の時間を過ごした。

「さて、これからどうするかな」

それは、退屈な時間もようやく終わって映画館を出てきたところだった。腕時計の針は既に午後四時を告げていて、あたりにはほのかに夕暮れの雰囲気が漂い始めていた。

「悪いけど、私これから用があるの」

「そんなこと聞いてないぜ」

「だって、言っていないもの。じゃあまたね」

平板な言葉に啞然としている僕を尻目に、穂波は足早に人込みにその姿を隠してしまった。慣れていたことではあったが、最近の穂波にはどことなく素っ気ないところがあり、それが僕を半ば呆れさせ、苛立たせた。付き合い始めた頃の新鮮さを失ったお互いの倦怠感のせいかもしれないが、僕の本能がそれとは違う警告を発していた。具体的にはわからなかったが、彼女に何かあったことだけは間違いないかった。僕は頭をゆっくりと左右に振りながら、それでも淡々と、夕闇に自分を紛れさせていくより他に方法がなかった。

その後の一週間は音もなく流れた。穂波からの連絡はなかったが、かといってこちらから連絡しようとも思わなかった。その意味で、僕も彼女に対する想いの変化を感じ、二人の辿り着く先を漠然と予期していた。

「突然電話してごめんね。実は、うちのビデオが壊れちゃったみたいなの」

ナツから電話がかかってきたのは、季節の変わり目を告げる雨が街角をしっかりと濡らしていた土曜日の夕方だった。僕は、近くのコンビニで夜のためのビールと食べ物を買って戻ってきたところだった。

「店で修理してもらえば？」

「うん、でも今日雨降ってるし……。純なら直せるかなと思ってどことなく元気のなさそうなナツの声が妙に気になった。僕はすぐに部屋を出ると、途中で白ワインを買いながら、西武線と小田急線乗り継いで彼女のアパートへ向かった。

「来てくれると思ってたんだ。さあ、中に入って」

思いの外元気そうなナツの声に後押しされるように部屋に入ると、目の前には十日ぶりの暖色系の空間が広がった。

「それで、壊れたビデオって？」

「ああ、あれなんだけど」

言いにくそうにナツが指差した先には、確かにビデオデッキが存在していた。僕はその上にあったテレビのスイッチを入れると、中にビデオが入っていることを確かめてから再生のボタンを押した。すると画面には、古い洋画のワンシーンが流れ出した。

「ちゃんと映るじゃないか」

「おかしいな。さっきまでは再生できなかつただけだ」

戸惑いながら呟くナツの瞳の動きで嘘を見破った僕は、話を変え

るようにワインを差し出した。

「じゃあ、直ったことを祝って乾杯でもするか？」

その一言に急に目を輝かせたナツは大きく頷くと、テーブルに二人分のグラスを置いた。僕はワインを多めに注ぐと、いつもより高めのテンションでグラスを重ね合わせた。

「純、今日は本当にありがとう」

「何言ってるんだよ。友達のビデオが壊れたんだから、来ないわけにはいかないだろ？ それに、今日は誰かと飲みたかったんだ」

「私でよかったの？」

「もちろん、相手にとって不足なしさ。今日はたくさん飲もうな」

僕の言葉に安堵したのか、ナツはこの間以上のハイペースでグラスを空け続けた。途中から少し飲み過ぎかとも思ったが、彼女の心の奥底に眠る悩みを察していた僕は、それに呼応するように飲み続けた。

「私ね、小さい時からお兄ちゃんのが大好きだったの」

ナツがそう言い始めたのは、ワインのボトルも底をつきかけた頃だった。既に日付も変わろうとしていて、外からのかすかな雨音以外は何も聞こえなかった。

「だから初めてお兄ちゃんに抱かれた時も、後ろめたさとか後悔は何も感じなかった。好きな人と一緒になれる嬉しさだけで胸が一杯だった」

「わかってるよ」

「でもね、時間が経つにつれて、このままじゃやっぱりいけないんじゃないかって思うようになったの。兄と妹っていうのももちろんあったけど、何て言うか、対等な関係じゃないって」

「対等な関係？」

「そう。だって、私はいつもお兄ちゃんに守られるばかりで、守ることができないの。それって私は楽だけど、お兄ちゃんは辛いんじゃないかって。不公平じゃないかって」

今日は素直にナツの想いを受けとめることができた。酔ったせい

かとも思っただが、何より彼女の正直さが胸に強く響いていた。

「高校を卒業したのがいいきっかけだった。お兄ちゃんと離れて一人暮らしを始めて。辛かったけどこれでよかったのよね。お兄ちゃんも結婚して幸せそうだし」

「ナツはどうなんだ？ お前は幸せなのか？」

「……そうじゃなかったら？」

「俺と幸せにならないか？」

どうにもナツの瞳に幸福を見出せなかった僕は、その想いのままに打ち明けていた。今なら、彼女を幸せにできる妙な自信があった。「でも、私は今でもお兄ちゃんを引きずっているのよ。そのことに純を巻き込みたくないの」

「もう十分に巻き込まれてるよ。ナツと初めて会った時から」

僕はワインで顔を赤くしたナツをゆっくりと抱き寄せると、その潤んだ唇から彼女の中に入っていった。もう、どんな結末がもたらされようが構わなかった。僕は自らの手で、懸命にもう一つの選択肢を作り出そうとしていたのだ。

「ねえ、私を抱いたこと、後悔してる？」

「まさか」

「そう、よかった」

その一言に安心したのか、ナツは目を伏せて僕の胸に鼻先をつけた。壁に掛かっていた時計の針は午前三時を指していて、外からの雨音も既に聞こえなくなっていた。

「俺、ナツに話していなかったことが二つあるんだ」

ナツの瞳が再び僕に向けられた。彼女には正直でありたい、素直になりたいと思った。

「実は中学二年の時、好きだった人がいたんだ。もちろん、ナツに振られた後のことだけど。最初の頃はそうは思わなかったんだけど、何度か会って話をしていくうちに、大切な人と気づいたんだ。でも、当時その人には付き合っている人がいた。君の兄さんだよ」

「それって、まさか……」

「そう、海野先生だよ。もっとも、今となってはもうどうしようもないけど」

「私、何て言ったらいいか」

わからなくて当然だと思った。突飛なことを言ったのは僕のほうなのだから。ただ、ナツには知っておいてほしかったのだ。それ以上のことは望んでいなかった。

「……もう一つは？」

「俺、今付き合ってる子がいるんだ。実は、この間和泉が話してた子なんだけど、去年の春に大学で偶然に会って、それからまた付き合い始めたんだ」

「そう」

物哀しげなナツの声がとにかく痛かった。もっとも、そう感じる自分をもっと痛かった。

「でも、俺たちもう駄目なんだ。何か歯車が噛み合わないっていうか、最近全然うまくいってないし、そもそも彼女を好きなのかどうかもわからなくなってきたんだ。だから、もう別れるよ」

「それでいいの？」

「今俺が大事なのは、ナツだけだよ」

「信じていいのね」

そう念を押すナツに、僕はその丸みを帯びた額に口づけをするこ
とで応えた。そう、僕はただ頑なに信じていたのだ。ナツとの新た
な関係を築き上げることで穂波から、いや真波の影から完全に抜け
出せることを。十四歳の自分の殻を脱ぎ捨てることができる。

その瞬間は意外に早く訪れた。三月に入った最初の日曜日の夜、
二週間ぶりの穂波からの連絡は、明日ドライブに行きたいという電
話だった。僕は、早速大学の友達に電話をして翌日の早朝に車を借
り、ZARDのアルバムをひたすらに聴きながら、昼過ぎには稲村
ヶ崎に着いた。

「ここに来るの、本当に久しぶりね」

穂波の声は、程なく薄く広がる白い雲に吸い込まれていった。晴
れ間こそなかったが、公園の高台から見る江ノ島はいつもと同じ存
在感を示していた。

「俺に何か話があったんだろ？」

「私たち、やっぱり別れたほうがいいみたいね」

予期していたこととはいえ、穂波の言葉は、真冬の海を渡る冷た
い風となって僕の胸を刺していった。そして彼女の発した次の一言
によって、僕は改めて男と女の間にある凡庸な複雑さを噛み締める
ことになった。

「好きな人ができたの」

六年前の時のアルバムが、鮮明な記憶となって目の前に蘇ってき
ていた。波の音は再び遠くに霞んでしまっていた。

「どんな奴なんだ？」

「年上の人よ。浩樹っていうの。去年の暮れに友達の彼を紹介された時に、たまたまその隣にいたの。会社の同僚だつて言つてたわ。それから四人で、飲みに行ったり遊びに行ったりしてるうちに……」

「浩樹つて、もしかして夏沢浩樹っていうのか？」

「そうだけど、どうして知ってるの？」

穂波の答えに、僕は偶然に彩られた現実を嫌というほど思い知らされていた。ここにもまた、浩樹の名前があつたのだ。

「でも、もし同じ人なら、先月結婚したはずだけど」

「そうよ」

「穂波、お前はそれでいいのか？」

「どういうことよ。まさか浩樹は結婚したから、不倫になるからやめろつても言うつもりなの？ 非常識だつても言うの？ 冗談じゃないわ。大体あなたはいつもそうよ。昔から普通だ、常識だつて言つては周りの目ばかり気にして。そう言うあなたはどんなのよ？ 初めから、高校の時から私のことなんか好きじゃなかつたくせに、どうして今まで付き合つてきたの？ それがあなたの言う常識なの？」

それだけを一気に言い放つと、穂波は駆け足で立ち去つていった。一人取り残された僕は、彼女の言葉の一つ一つを自分に問いかけてみたが、やはり何一つ反論することはできなかった。全ては穂波の言うとおりだった。僕は、彼女を愛していなかったばかりか、その中に真波の影を追いながら付き合つていたのだ。最初から穂波の姿など見ていなかったのだ。僕は、未だに真波を想う自分の本質を知つて身動きができなかつた。複雑に見えた人生のジグソーパズルは、実はいともたやすく解けてしまうほど単純なものだったのだ。

やがて、何とか現実を直視することができるようになった僕は、高台からゆっくりと石段を下ると、海岸通りを歩いて和泉の働くサーフィショップに向かった。一人では、粉々に砕け散った心をまとめ合わせる事ができなかったからだ。

「よお、純じゃないか。どうしたんだよ、急に」

でも、その呼びかけに反応できなかった僕を見て、和泉はただならぬ心配を感じたらしく、オーナーに何かを告げた後、僕を二階の部屋へと誘った。正月に訪れた時と同じく、正面にはガラス越しの海が見えたが、下り坂の天候によって雲はその厚みを、やや高いうねりとともに波はその白さを増していた。

「悪いな。急に来ちゃって」

「そんなことはいいんだけど、何かあったのか？」

「俺、もう何が何だかわからなくなったんだよ。たった今穂波と別れてきたんだけど、アイツ、ナツの兄さんと付き合ってたんだ」

「穂波って……お前たちまた付き合ってたのか？」

そう言えば、和泉には話していなかったな、と思っただが、それも一瞬のことだった。僕はただ、誰かとこの不可解な状況を共有したかったのだ。理不尽な事実を聞いてほしかったのだ。

「ああ。でも驚いたよ、またナツの兄さんだよ。これじゃ、昔と同じじゃないか」

「でも、ナツの兄さんはこの間結婚しただろ？」

「付き合い始めたのはその前かららしいけど、まあ今となっては見事に不倫だよな」

「そうか。それは大変だったな」

「でも、そんなことはもうどうでもいいんだ。どうしていいのかわからないのは自分の気持ちのほうなんだ。穂波に言われてわかったんだ。まだ真波を好きなんだって。忘れてなんかいなかったんだ。」

やっぱり男と女は単純だったんだよ」

僕の矢継ぎ早の叫びを、和泉はただ黙って聞いていた。春の柔らかな日差しのように、あるいは夏の海で囁く風のように。

「人の気持ちって、そうは簡単に変わらないんだよ」

それは、和泉がおもむろに口にした言葉だった。そして、彼女はかすかな波の音をバツクになおも続けた。

「私と純の関係だって、昔からずっと変わらずにきてるだろ？ 確かに男と女の関係じゃないけど、どっちにしても本質的には同じような気がする。単純じゃなくて不変なんだよ。だから、純が海野先生を想う気持ちは当然だと思う。ただ、彼女は既に死んでしまったんだ。今の純の気持ちは大事にしなきゃいけないと思うけど、それに縛られてもいけないと思うんだ。私だって、心と体のねじれを受け止めながら、それに縛られないように、これでも毎日努力してるんだ」

「和泉、もし間違ってたら言ってほしいんだけど、お前本当は、まだナツのことが好きなんじゃないのか？」

僕の直感から出たその問いかけに、和泉は答えを与えてくれなかった。ただ口元をかすかに緩めて微笑んでいるだけだった。

「あつ、もうこんな時間だ。そろそろ店に戻らないと。純、いろいろ大変だと思うけど頑張れよ。また今度ゆっくり話そうな」

僕をはぐらかすようにそう言った和泉は、立ち上がるとドアに向かって歩き出した。窓越しに外を見ると、いつの間にか降り始めた雨が海岸通りを、そして白く波打つ海をしつとりと濡らしていた。

僕は、そんな光景と和泉の後ろ姿を交互に見ながら、人の気持ちの不変さについて思いを巡らせていた。それは、何より僕自身が真波を通じて痛感していたことだったが、同じ意味でまた、和泉もナツを通じて感じているはずだった。はつきりとした根拠はなかったが、僕は彼女の言葉の端々からそれを感じる事ができた。何故なら、僕らはそれほどまでに親友だったからだ。そこにはもはや答えなど必要なかった。

その後の一週間は、僕にとって苦悩と忍耐の連続だった。穂波とは稲村ヶ崎で別れたきり、会うことも声を聞くことさえなかったが、それよりも僕は、彼女を通して見続けていた真波の幻影を見られない寂しさに打ちひしがれた。アルコールを使ってその想いを断ち切るうとしたが、翌日の割れるような頭の痛みとともに虚無感を増すだけだった。ナツに会おうとも思ったが、真波への想いを打ち消すためであることを悟られる恐怖で連絡を取ることができなかった。もっとも、そんな泥を舐めるような日々にも突然の終わりがやってきた。

その夜、部屋でビールを飲みながらぼんやりとテレビを見ていた僕は、若くて律儀そうなアナウンサーが報じたあるニュースに釘付けになった。それは、都内のマンションの屋上から二十歳の女性が落下して死亡したというものだったが、僕が驚いたのはそのマンションを知っていたからではなく、その女性の名前と写真に見覚えがあったからだった。

その制服姿から高校時代に撮られたものに間違いなかったが、証明写真のように強張った表情でこちらを見つめる顔は間違いなく穂波だった。僕は、なおも画面をぼんやりと眺めながら、その写真が示す意味を懸命に理解しようとしたが、どう考えてもそれは唐突で理不尽だった。穂波が自分の住むマンションの屋上から落下して死んだ事実は、それほどまでに受け入れ難かった。喧嘩別れのようになってしまったとはいえ、彼女と過ごした月日はまだ鮮明に脳裏に焼きついていて、記憶や思い出になるにはあまりにも生々しかった。僕は六年前の真波に続いて、今穂波までも失ってしまったことで、明らかに混乱し動揺していた。何杯のビールを飲んでも、その心の震えを止めることはできなかった。僕は立ちほだかる現実を、やるせない想いを誰かと共有したい欲望に駆られたが、鎌倉にいる和泉の他にはナツしか思いつかなかった。僕はその気持ちのままに部屋を飛び出すと、夜更けの西武線と小田急線を乗り継いでナツのアパートに向かって急いだ。

ドアの前に立った頃には既に午後十一時を過ぎていたが、何度プザーを押しても中からは全く反応がなかった。苛立ちを抑えられずにドアノブに右手をかけてみると、意外にも鍵はかかっておらず、僕はゆっくりとドアを開けて中に滑り込んだ。明かりのない空間は物音一つせず、僕は足音を立てないようにキッチンの横を抜けて、ガラスの扉越しに奥の部屋を見ると、ベッドの中で静かに揺れ動く

二人の女性の体があった。それがナツと和泉だとわかるのに時間はかからなかった。僕は、どうしていいかわからずしばらく立ちすくんでいたが、結局時計の針を巻き戻すようにゆっくりと部屋を出るしかなかった。帰りの小田急線の中でも、少し前に見た光景が理解できずに呆然としていたが、時間の経過とともに事態を把握できるようにになると、今度は二人の本質を知ってしまったやるせなさで胸が一杯になり、訳もわからず車両の床に蹲って頭を抱えた。涙がとめどなく溢れ出てきたが、最後までその呻きが声に出ることはなかった。そう、僕はナツだけでなく、長い間信じきっていた和泉にまで根源的に裏切られたのだ。

僕は気が変になりそうな自分を抱えながら、それでも何とか立ち上がろうと必死になった。あの夜に見た光景は夢幻だと思い込もうとした。でもそれは、どうにも拭い去ることのできない現実だった。交錯する二人の白い肌が、記憶の隅々にまで深く刻まれていたからだ。僕はもはや誰を信じ、愛すべきなのかがわからなくなり、真波や穂波との儂い世界に身を委ねようとした。夢と現実の間にある高くて細い塀の上を歩き続けた。とはいえ、いつまでも現実から逃れているわけにはいかなかった。非常識であれ異常であれ、少なくとも僕は真実を知らなければならなかった。そうしないことには、僕という存在が内から崩れ去ってしまうような気がしたからだ。だから僕は意を決し、三月も終わろうかという月曜日に和泉と会うことにした。

その日は朝から季節外れの雪が舞い、僕はカーキ色のコートのポケットに両手を入れながら、夜九時過ぎの稲村ヶ崎駅に降り立った。そして、サーフィショップの二階のドアを叩くと、白いトレーナー姿の和泉が顔を出したので、買ってきた白ワインを差し出すと、促されるまま部屋に入った。

「悪かったな、こんな時間に。店長に用事頼まれちゃってさ。でも、この時期に雪が降るとはな。寒かっただろ？」

いつもと同じ口調で話す和泉を見ながら、それでも僕はうまく話を切り出せずに、流れのままにワインで乾杯した後もひたすら飲み続けるしかなかった。

「それで、今日は何の話だ？ 話したいことがあるんだろ？」

それはひとしきり時間が過ぎた頃だった。窓外にちらつく雪は次第にその勢いを増していたが、僕の心はそれ以上に冷え切っていて、和泉の問いかけに辛うじて反応するのが精一杯だった。

「この間、ナツのアパートに行ったんだ」

「そうか。ナツ、元気にしてたか？」

「俺、見たんだ。お前とナツが抱き合ってるところを」

その言葉にもかかわらず、和泉の表情は全く変わらなかった。でもその顔色は青白く、仮面を被っているように平板だった。僕は、何とか和泉の心の仮面を取り去る勇氣を持つと、ただ気持ちを落ち着けることに懸命だった。波の音は雪に掻き消されて全く聞こえなかった。

「突然何を言い出すのかと思えば、一体何のことだ？」

「半月くらい前のことだけど、穂波がマンションの屋上から落ちて死んだニュースをテレビでやっていて、俺本当に驚いたんだ。何て言うか、頭の中が真っ白になって、どうしたらいいのかもわからなくなってる」

「そのニュースは私も見たよ。何て言っていいかわからないけど、大変だったな」

「そしたら何だか急に寂しくなって、誰かに自分の気持ちを言いたくなつたから、部屋を飛び出してナツのアパートに行ったんだ。本当は和泉と話したかったんだけど、ここまで来るにはもう遅い時間だったから」

そこまで言うのと深呼吸をし、僕は和泉の瞳の奥をじっと見つめた。そこにかすかな動揺を見出そうとしたが、和泉は相変わらず平板な表情を崩そうとはしなかった。

「ナツの部屋の前まで来て、それから何度もブザーを押したんだけど反応がなくて、でも鍵がかかってなかったから、少し迷ったんだけど中に入ったんだ。そしたらガラスの扉越しにベッドが見えて…… ナツとお前が抱き合ってたんだ」

「純の見間違いじゃないのか？ ナツはともかく、そんな状況でもう一人が私だって言い切れるのか？」

「いや、確かに部屋は暗かったけど、あれは間違いなくお前だった俺にはわかる。俺たちはずっと友達だったんだぜ。見間違っわけがないさ」

「友達だった……か。もう過去形なんだな」

寂しそうな和泉に心が揺らいだ。後戻りのできない重圧をはねのけるだけで精一杯だった。

「本当のことを言ってくれよ。俺は真実が知りたいんだ。そうしないと、俺はこれから何を信じて生きていったらいいかわからないんだ」

その切実な訴えが和泉に届くまでにかかなりの時間を要した。和泉は、伏し目がちに視線を落としたまま微動だにしなかった。僕はただ、投げかけたボールを和泉がキャッチしてくれる瞬間を待つしかなかった。

「信じられるのは自分だけなんだよ」

ようやく放たれた和泉の一言は僕に対しての答えのようでもあつ

たし、単に自分に言い聞かせているだけのようでもあった。

「私は、小さい時から誰も信じてなんかいなかった。女の体を持つた男の私は、親を含めた周りから疎まれ、時にははつきりと嫌がられた。誰も私のことを信じてくれなかったし、もちろん愛してもくれなかった。でも、そんな中であってただ一人私を好きになってくれたのがナツだった。彼女だけが私の救いだったんだ」

「俺は……俺のことはどうだったんだ？」

「いい友達だったよ、少なくとも表面上は。でも、純は私を軽蔑してただろ？ 本当の私を知った瞬間から」

「それは……」

「違うとは言わせないぜ。それに、ナツを好きなことも気に入らなかった。この私から、たった一人の友達を奪おうとしていたんだから」

和泉の真実を突きつけられた僕は、返す言葉もなかったただ呆然とするしかなかった。和泉の言うとおりだった。少なくとも、彼女を特別視していたことは隠しようのない事実だった。

「でもその時は、結局どうにもならなかった。兄さんが相手じゃ勝ち目がないしな。もっともそのことで、私はナツのことがもっと好きになった。彼女と私は似たもの同士なんだよ。お前の言葉を借りれば非常識、いや異常という意味だな。だから、正月にお前が遊びに来て、ナツの兄さんの結婚を聞いた時は喜んだよ。いよいよ私の出番だっと思ってんだ。でも、そこへお前がまた割り込んできた。しかも、真剣に付き合おうとしているならともかく、お前は海野先生を忘れるためにナツを利用した。私には何よりそれが許せなかった」

「ナツを利用するなんて、そんなこと……」

でも、和泉は僕の言葉を無視するように話を続けた。窓外の雪は更にその勢いを増していた。

「この間お前がここに来て、穂波がナツの兄さんと不倫していると聞いた次の日、私はナツのアパートに行ってそのことを話したんだ。彼女泣いてたよ。そりゃそうだよな、まだ兄さんのことが好きだったんだから」

「それは俺にだって……」

「本当にわかってたのか？ いや、お前にはわかるはずがないさ。だからナツと付き合う資格がないんだ。この前も言ったとおり、人の気持ちは不変なんだよ。お前も言ったよな、男と女は単純だつて」

淡々と着実に話を進める和泉に圧倒されていた。ナツの悩みや苦しい胸の内など、十分に理解しているつもりだった。わかっているから僕は目を背けていたのだ。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ。とにかく、ナツは穂波のことが許せなかった。兄さんの結婚自体は何とか受け入れられたんだけど、不倫まではとても許せなかったんだ。だから私が言ったん

だ。こうなつたら穂波を殺すしかない、あの女は疫病神だつて」

「じゃあ穂波は」

「私とナツで突き落としたんだ」

和泉の一言に、僕は彼女の心の仮面が想像以上に厚いことを痛感した。この瞬間が夢であつたならと、夢幻の世界に佇む真波に必死に助けを求め続けた。

「もつとも、最初から殺すつもりじゃなかった。穂波の通う大学で住所を聞いて……ああ同じ大学だったよな。それであの夜、二人でマンションに行ったんだ。ナツが妹だつて名乗つたら少し驚いてたけど、三人で屋上に上がつて話をしたんだ。ナツ、必死に訴えてたよ。兄さんと別れてくれて」

和泉の話聞きながら、それでも僕は突きつけられた真実を受け入れたくなかつた。容認したくなかつた。でも和泉は容赦なく先を続けた。

「でも、穂波は首を縦に振らなかつた。それどころか、ナツのことを馬鹿にしたんだ。妹だからつて、あなたに言われる筋合いはない頭がおかしいんじゃないかって。けたたましく笑いながら言い放つたんだ。だから、示し合わせた訳じゃなかつたんだけど、二人の両手で、四本の手で穂波を思い切り突き飛ばしたんだ。そしたらあの女、よろけながら後ずさりして、そのまま下に落ちていったんだ」

周囲は物音一つしなかつた。ただ和泉の低い声だけが部屋中に響き渡っていた。

「その後人目につかないように、急いでナツのアパートに戻つたんだけど、ナツの体の震えが止まらなかつたから、ベッドに寝かせて横で寄り添つてたんだ。そしたら急にすすり泣く声が聞こえて……。だから言つたんだ。大丈夫だよ、私がついてるからつて。私がずつとそばにいるからつて言つたんだ。まあ、そこをお前に見られていたとは思わなかつたけど」

「どうして……」

「お前にはわからないだろうな。こうなることは必然だつたんだよ。

私とナツが一つになることは六年前から、いやそれ以前から決まっていたんだよ」

「それは違う。そんなことは……」

「お前はまた言うのか？ そんなことは非常識だって、異常だって。そう言っている限りお前はナツとは付き合えない。永遠に一つにはなれないさ。そうやって、ずっと常識の殻の中に閉じこもっていたから、海野先生だって、穂波だって離れていったんだ。誰もいなくなっただよ。全部自分の撒いた種さ。自業自得だよ」

「違うそうじゃない。俺は、ただ俺は……」

その言葉の後を、僕は一つの決定的な行動で示すしかなかった。和泉の非常識さを、異常さを糾弾するために、何より自分自身を正當化するために。僕は勢いのままに和泉を押し倒すと、その白いトレーナーを汚すように彼女の体を弄りながら言った。

「いいか、よく聞けよ。お前は女なんだ。正真正銘の女なんだ。今俺がそれを証明してやる」

その言葉が和泉に届いたかどうかなどもうどうでもよかった。僕はただ彼女の体が、彼女自身が女であることを証明することで、自分の常識が正しいことを示したかったのだ。それ以外に術はなかった。その時に脳裏を過ぎった真波の叫びももはや聞こえなかった。僕は窓外を雪が白く染め続ける中で和泉の体の隅々を、心の全てを赤く染め上げていったのだ。

全てが終わった後、僕は傍らに脱ぎ捨てられた自分の衣服を着込むと、和泉のすすり泣く声を残して足早に部屋を出た。既に日付は変わっていて、雪の勢いは少しづつ衰えを見せていたが、海岸通りを横切って純白に染められた砂浜に降り立つと、その行為の重大さが体中を刺す海風となって僕をきつく締め上げた。確かに和泉が現実的に女であることを証明できたが、彼女の非常識さや異常さを責める前に、誰にも増して自分自身がそういう人間になってしまっていた。かつて真波を傷つけた男と同じ人間として存在してしまっていたのだ。僕は和泉を通じて間接的に真波をも汚してしまったことに気づき、目の前を降りしきる雪の向こうに真波の影を必死に追い求めた。でも、全てには既に手遅れだった。取り返しのつかない現実には、白い雪の純粹さでは覆い隠せないほどに決定的なものとなってしまったのだ。どれだけ逃れようとしても、既に起きてしまった真実だった。

その後の時の経過を、僕はほとんど覚えていなかった。どこをどのように歩き、何を見てきたのか。でも気がつくと、見覚えのあるドアの前に立っている自分がいた。それが誰の部屋のものなのかを思い出すまでにかかりの時間を費やしたが、ブザーを押した後に開かれた空間から顔を出したその姿によって、僕は否応なくそれを認識することになった。

「純、どうしたの、こんな時間に」

ナツの柔らかい声にもうまく反応できなかった。僕は疲れた体を引きずるように中に入ると、その場に崩れるように倒れ込んだ。ナツの驚いた顔が見えたが、それもほんの一瞬のことだった。

次の瞬間に目を開けた僕は、ピンクのベッドに横たわる自分の存在を徐々に取り戻していた。暖色系の空間は以前と同じようにそこにあり、ゆっくりと起き上がって後ろを振り返ると、キッチンに佇

むナツの後ろ姿が夢幻の世界でないことを僕にはつきりと教えていた。

「俺、どうしてここに……」

「あっ、気がついた？ 今暖かいコーヒーでも入れるから。それとも何か食べる？」

「今、何時だ？」

「夜の九時過ぎよ。まったく、明け方に訪ねてきたと思ったら急に倒れ込んだじゃって。どうしたのかと思ったら、それから死んだように眠っちゃうんだもの。何かあったの？」

ナツはその言葉とともにこちらに歩み寄ってくると、僕の目の前に熱いコーヒーを差し出した。白くて柔らかかそうなセーターに薄いベージュのパンツ姿は、後ろで束ねられた髪とともに穢れのない清純さを表しているようで、それが痛いほど僕の目に染み入ってきた。「俺、取り返しのつかないことをしたんだ。もうどうしようもないんだ。何もかもが終わってしまったんだ」

「一体何をしたの？」

「和泉を……レイプした」

その後のナツの、一瞬の表情の変化を僕は見逃さなかった。空気は死んだように重くなり、彼女は目を大きく開けてこちらを見たまま止まっていた。そこに浮かんでいたのは僅かの驚きと、それとは比較にならないほど大きな疑問のようだった。

でも次の瞬間、僕の目に飛び込んできたのは、意外にもナツの優しい眼差しだった。

「たとえ純が何をしたとしても、何を想ったとしても私は責めないわ。その資格もないし……。でも、何かあったのかだけは正直に話してほしいの」

「俺、お前と和泉がこのベッドで抱き合ってるのを見たんだ」

僕のその言葉にもナツの表情は崩れなかった。全てを最初から知っていたかのように穏やかなままだった。

「その訳を知りたい？」

「いや、和泉から聞いたから。穂波のこと」

「でも、それだけが理由じゃないわ。確かに穂波さんのことで動揺したし、誰かにそばにいてほしいとは思ってたけど、誰でもよかった訳じゃないの」

「俺じゃ駄目だったのか？」

僕の問いかけに、でもナツははっきりと答えを示してはくれなかった。それは否定でも肯定でもない、全く別の種類のものだった。

「和泉とは、昔から何か通じるものがあつたわ。単なる友達じゃなくて、もっと深い部分で繋がっているような、親友ともちよつと違うんだけど……。だから、何でも話し合えたし分かり合えた。私の悩みは和泉の悩みでもあつたし、和泉の苦しみは私の苦しみでもあつたの。体は二つだけど心は一つだった」

「でも……」

「抱き合う理由にはならない。純ならそう言うと思つてたわ。何より私たちは女同士だものね。でもね、人と人が触れ合うのって、必ずしも体だけじゃないと思うの。心だつて激しく求め合っているはずよ。そのほうが余程大事なことよ」

ナツの語る一つ一つが僕の胸に鈍く突き刺さつた。男と女ではなく一人の人間として、その体よりも心と交わる大切さを思い知らされていた。常識さや普通さよりも遥かに重要なその事実を。でも、それを認識すればするほど僕は、心の奥底を吹き抜ける虚しさに打ちひしがれた。そう、僕は結局のところナツや和泉と心を共有していなかったのだ。だから彼女たちから、いや真波や穂波からも求められてはいなかったのだ。

「やっぱり純にはわからないかな？」

「俺、シヨックだったんだ。和泉とは中学の時から親友だと信じてきて、お互いに分かり合えてきたと思っていたのに、結局は俺の独りよがりで、悔しくて情けなくて、自分のすべてが否定されたような気がして、それで和泉にあんなことを……。でも、すべては俺の責任なんだよな。和泉も言ってたよ、自業自得だって。ナツのこともそうだよ。小さい頃から幼馴染みたいにも一緒だったから、すべてをわかった気になっていただけだったんだよな。兄さんのことも理解しようとはしなかった。心のどこかでずっと思ってたんだ。非常識だ、異常だって。でも、今頃気づいたってもう遅いよな。俺の周りにはもう誰もいない、何も無い。すべては終わってしまったんだから」

「そんなことないわ。純がいたから、私たち三人はうまくやってこられたのよ。あなたの常識さで、私も和泉も救われてきたわ。ともしれば行き過ぎる私たちを繋ぎとめてくれたもの。和泉にもそれがわかっていたから、今まであなたと付き合ってきたのよ。私だって、純の存在でどれだけ助けられたか。大体そうじゃなければ、とうの昔に私たちは終わってるわよ」

訴えかけるナツの声が、風穴の開いた僕の心を懸命に癒してくれていた。自分の存在理由を、その価値を認めてくれているように思えた。

「ナツは俺を許してくれるか？ 大切な和泉を汚した俺を。常識に捉われ続けたこの俺を」

「許すも許さないもないじゃない。だって私たちは……」

「友達だから」

僕は待ちきれなかったこの一言を、ナツの言葉に続けて口にした。そしてそれは、周囲に誰もいなくなってしまった僕の最後の救いと

してナツが存在している事実を端的に示していた。

僕らはその後、ナツが作ったアサリ入りのスパゲティを食べながら、白ワインを飲んで過ごした。ZARDの曲が静かに流れる空間は、久しぶりに味わう落ちついた雰囲気であふれに満ちていて、僕は時折ナツと他愛のない話をしながら次第に優しい気持ちになっただけだった。

「そう言えばナツは、いつからZARDを聴くようになったんだ？
中学の時は聴いていなかったよ。何だか急に昔が懐かしくなって、

「純と久しぶりに会ってからのよ。でも不思議よね。今になってようやくこの歌のよさがわかるようになったんだから」

「俺もだよ。昔は何となく聴いていただけだったけど、今はその歌の意味が痛いほどによくわかるんだ」

「お互いにいろいろな経験をして成長したってことかしらね」

ナツは感慨深げにそう言うと、ワインを一口飲んだ後で軽いため息を漏らした。その視線は、既に遠く去ってしまった自分の記憶をゆっくりと辿っているようにも思えた。

「ナツ、お前まだ兄さんのことが好きだったんだな」

気がつくと言っていた自分に少し驚いた。もっとも、ナツから答えをもらおうとは思っていなかった。

「和泉に言われてはっとしたよ。でも考えてみれば、人の気持ちなんてそうはたやすく変わらないものな。俺だって、六年経った今でも真波のことは忘れられないし」

「私とお兄ちゃんとの関係は特別なの。忘れようと努力はしたけどね。もちろん非常識だとも思ったわ。純の言うように」

「もう思っていないよ」

「わかってるわ。でも、この気持ちだけはどうしようもなかったの。だって最初からそうだったんだもの。小さい頃からずっと……。好きだとか愛してるとか、そんな言葉では表せないくらいに」

ナツの声は、真実に裏打ちされた重みをもって僕の胸に響いていた。彼女の切実な心の叫びが、ZARDの曲を伝って体の隅々にまで行き渡っていった。

「だから許せなかったの。私の大切なお兄ちゃんを不幸にするあの女の存在が。お兄ちゃんの苦しみは私の苦しみでもあるんだから」

「でも俺が言うのも変だけど、ナツの兄さんは自ら進んで穂波と付き合ってたんだろ？」

「だとしても、少なくともお兄ちゃんのためにならないわ。せつかくの新婚家庭だって壊れることになりかねないし」

「だから突き落としただね」

「最初から決めてたわけじゃなかったの。でも穂波さんと話しているうちに、あの女の底意地の悪さがわかったの。純の前では言いにくいけど、直感的に思ったの」

「わかったよ、別に責めてるわけじゃないんだ。俺だって和泉にあんなことをしたんだから。決して許されないことだけど、だからこそ俺たちは、これから前を向いて歩いていかなきゃいけないんだよ。そうだろ？」

僕に同意を求められたナツは、その首を小さく縦に振ることで答え、それから僕の肩にゆっくりと身を委ねてきた。僕はその髪を何度も撫でながら、たった今自分の言ったことを自らに課そうとの想いを新たにしていた。いつまでも後ろを振り返ってはいけけないのだ。自らの犯した罪を十字架として背負いながらも、未来に向かって懸命に生き抜いていかなければならないのだと。

でも、堅固なまでに思えた僕らの誓いも、次の日には見事に崩れ去ることとなった。目を開けると、テーブルの上にはワインの空き瓶と二つのグラスが寂しげに佇んでいて、その向こうにある薄いピンのカーテンの隙間から差し込む光をプリズムのように反射させていた。いつの間にか眠ってしまったらしく、振り返って壁に掛けられていた時計を見ると、その針は朝の九時を示していた。僕は、割れるように痛む頭を体から外したい欲求に駆られながらも、次の瞬間昨夜とは明らかに異なる空気が流れていることに気づいた。全てがよそよそしく、自分の存在が浮ついているような気がした。その原因が何であるかがわかるまでに多少の時間がかかったが、すぐ横にあるはずの柔らかな温もりがないことが、ナツがこの空間にいない事実をはつきりと教えていた。始めのうちはその理由を考えることすらしなかったが、時が経つにつれてその疑問は次第に重みを増し、三十分が過ぎた頃には決定的な不安となって僕の心を否応なく襲った。居ても立ってもいられなくなった僕は、立ち上がったドアのほうに向かおうとしたが、その間に目の前を過ぎたあるものの存在が、外に出ようとする自分の意思を止めさせた。テーブルの上で空のボトルやグラスと一緒に置いてあったもの、それは目が痛むほど真っ白な紙に記されたナツの文字の数々だった。手紙は何枚かにわたっていたが、僕は底知れぬ不安を静めようと、ただ一心不乱に、一文字一文字を取り出すように丁寧に読み始めた。

親愛なる純へ

純に手紙を書くなんて、長い付き合いの中でも初めてだね。何だかとても不思議な気がします。でも、今の私の最後の気持ちだけはきちんとした文字で表しておきたかったの。純の記憶の中だけではなく、私が生きた記録として永遠に残しておきたかったの。

夕べは久しぶりに落ち着いた雰囲気に浸れました。これも純と一緒にいられたおかげかな？　そして、やっと決断をすることができました。今までかなり迷っていたんだけど、純といろいろな話をし、前を向いて歩いていこうって励まされて、それでようやく自分の進むべき道がはつきりとわかりました。私も自分の人生にけじめをつけます。そして、十字架を背負いながら別の世界で生きていきます。穂波さんのことだけが原因ではありません。私はもう、この世界では生きていけないのです。唯一の支えであったお兄ちゃんが結婚して私から離れ、これまで一心同体だった和泉ともこの先うまくはいかないでしょう。そして純とも……。あなたにはとても感謝しています。できれば一緒に前を向いて歩いていきたかった。でもあなたはいずれ私を重荷に感じることになるでしょう。絶望的な苦しみの中でもがき続けるでしょう。私にはそれが耐えられません。あなたをそうした底なし沼に引き込んでいくことに。だから今お別れます。さよならを言います。

今までの人生に悔いがないと言ったら嘘になります。でも、もう一度やり直しても、多分私は同じ道を歩むでしょう。何故ならそれが私だから。非常識だろうが異常だろうが、それが私自身なのだから。

少し長くなってしまったのでこの辺で終わりにしますが、最後に純、あなただけは生きてください。私の分まで、そして海野先生の分まで。純なら大丈夫だから。この切なくて儂い世界でも十分に生き抜いていけるはずだから。一人で逃げ出すようで胸が痛いけど、陰ながらあなたの幸せを祈っています。

じゃあね。海野先生に会えたらよろしく言っておくから。

気がつくとも僕は飛び出していた。右手に手紙を握り締めながら、ナツの向かったであろうあの場所へ。

エピソード

昼に近づきつつある稲村ヶ崎は、一昨日の夜に降った雪の余韻が残っていたせいかどことなく物憂げで閑散としていた。あるいは、本格的な春が訪れていないせいかもしれないが、僕はそんな自らの想いが投影されているような公園の石段を足早に駆け上がると、高台の隅々にまでナツの影を追い続けた。天空から降り注ぐ日差しは僕を暖かく包んでくれてはいたが、それとは裏腹に、僕の心は荒波に翻弄される小船のように激しく揺れ動いていた。もはや江ノ島の姿も目に入らなかつた。でも、どれだけナツの名前を叫んでも、目の前にその姿や声が現れることはなかつた。ただいつもの芝生や木々や草花たちが、少しも囁くこともなく佇んでいるだけだつた。ナツがこの公園に来たことは間違いないはずだつたが、その気配や痕跡を何一つ見出すことができなかった。僕は、それでも何とか頭を巡らせてみたが、他の場所に向かつた可能性はないはずだつた。和泉のところかとも思ったが、僕の愚かな行為を聞いた後ではそれはないだろうと感じた。ナツは別世界へ向かう入口へと向かつたのだ。だとすれば、この場所以外には考えられなかつた。

ナツは既にこの世界には存在していないのかもしれない。真波や穂波のいる夢幻の世界から僕を暖かく、いや軽蔑の眼差しで見ているのかもしれない。そう考えると僕は、心の奥底から溢れ出る絶望的な虚無感に蝕まれ、そのまま自らの存在を失つてしまつたかのように立ちすくんだ。僕の周りには、もう誰一人としていなかった。真波も穂波もナツも、そして和泉の心さえも、こことは異なる世界に存在していた。僕はそのあまりに悲痛な現実の頭を抱えて蹲つたが、全ては既に終わってしまった。目の前には取り返しのつかない現実が、無限の砂漠のように広がっているだけだつた。そこにはひとかけらの救いもなかつた。緑のオアシスは存在していなかつた。寂しさのあまりに、彼女たちの世界へ向かおうかとも思

つたが、抜け殻のような僕にはその勇氣すら持ち合わせていなかった。涙すら出なかった。先へ進むことも後戻りをすることもできなかった。ただこの鎌倉の地で、ひたすら無残な自分を見つめ続けるしかなかった。常識さや普通さに捉われ続けた果てに、自分を含めた全てを失ってしまった儂い一つの存在として。

僕にとっての鎌倉に、そうして夏は永遠に訪れることがなかった。

ナツの死体は、それから一週間後に七里ヶ浜で発見された。波乗りをしようとしていた和泉が見つけたのだが、久しぶりの彼女からの電話でそれを聞かされた夜、僕は部屋で一人ZARDを聴きながらあてもなく泣き続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727d/>

夏なき鎌倉

2010年10月8日14時14分発行